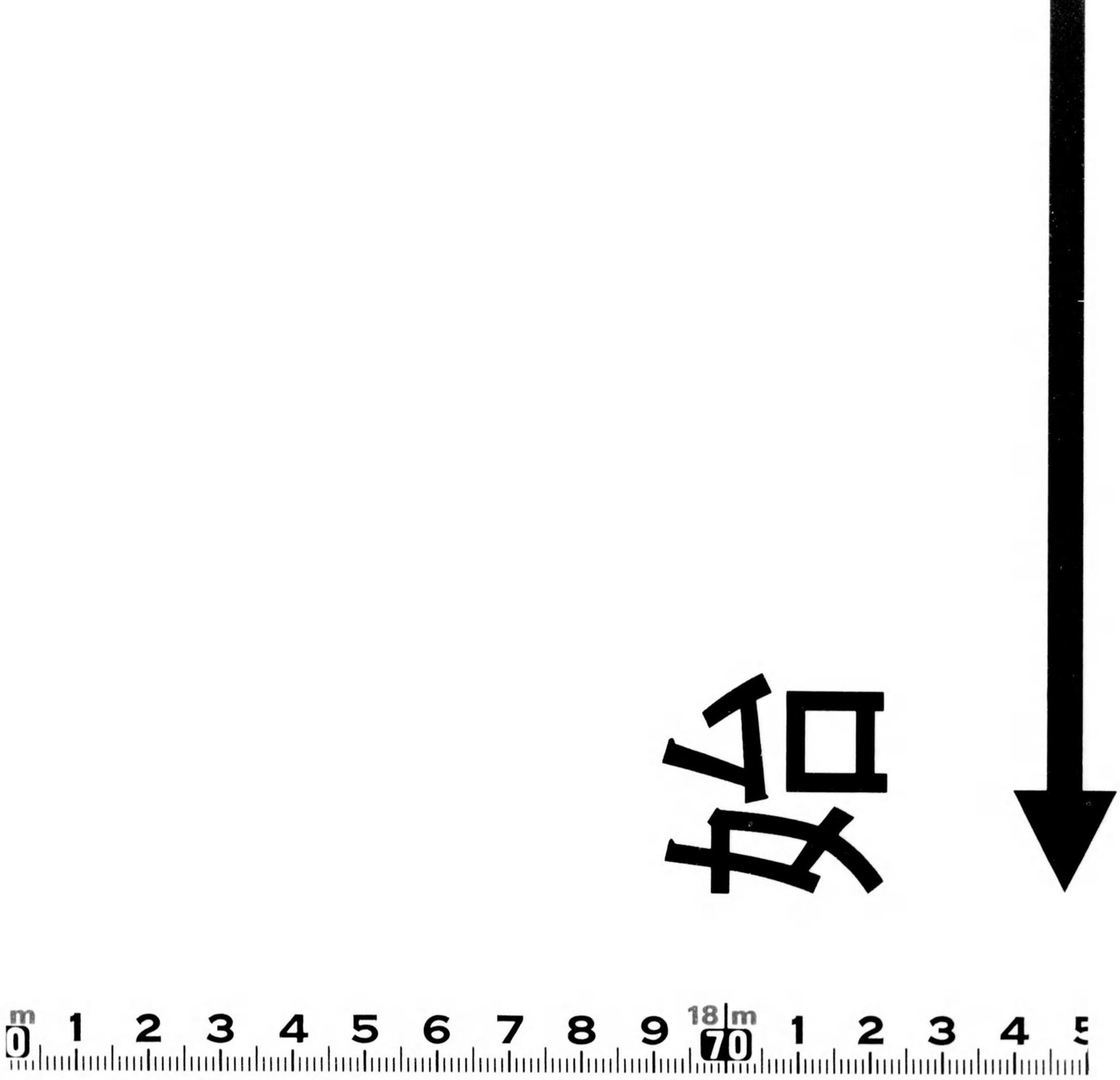
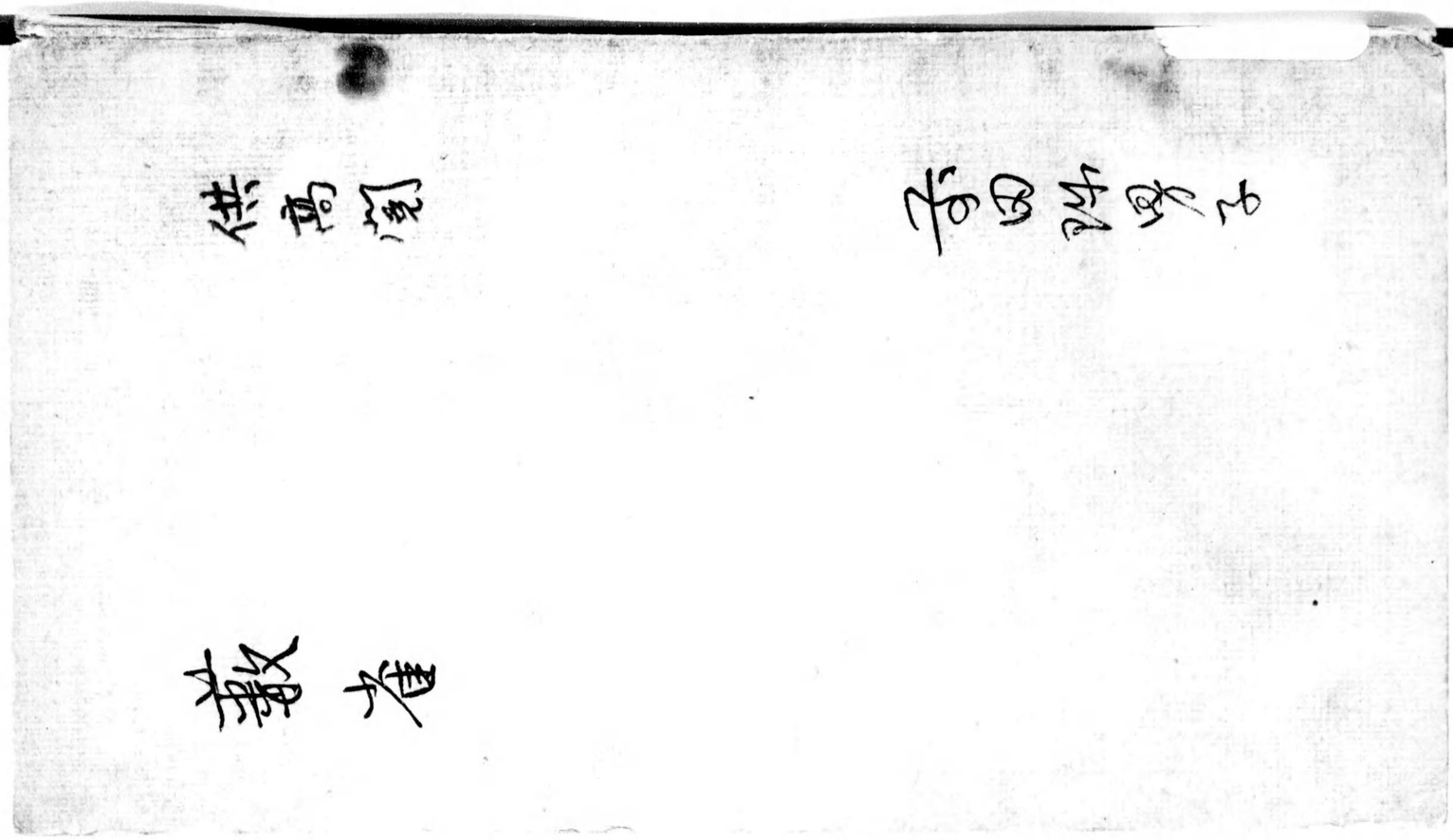

設
m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 m 70 1 2 3 4 5


然而氣
而氣然
氣而然

特102
875

長上先輩並に辱知各位

御高覽に供ふべく御手許へ差出候當冊子は拙生が刀圭の餘暇各雜誌社新聞社より依頼されて寄稿致候もの、此方から依頼して掲載して貰ひしもの、又は時々湧き出づる感想を識して責を塞いだものから其一部を拾集し、年代順に掲載致候ものに御座候。

發表當時誤解を慮り態と匿名に致候ものも有之候得共最早時効に懸り候事と心得此度臆面もなく御茶を湧候。

藪雀と命題致候は知友の入智惠其儘に有之候、科學に關する論文等は一切差控へ候得共記す處の藥臭さは何と申しても本職の然らしむる處と御勘辨被下度候

所說の御賛否、主張の御取捨は勿論各位の御宏量に御任せ申上候、只拙生の微衷の存する處を憐みて見界狹き輩の常識の發露とでも思召被下候得ば本懷の至に存候。中には愚論ながら幸に當事者の注意を惹きて既に實行せられ候ものも有之候、また將に

著者寄贈本
寄贈

實行せられむとするものも有之候、何事も時世時節と存候。

知命の域に達し候を期とし成業三十年記念として本冊子發刊致候に臨み愚見發表の機會を與へられし各雜誌社新聞社に向つてのみならず、直接間接に援護せられたる各位に感謝の意を表する事を御許容被下度候。敬具

大正九年春

著者

藪雀目次

一、稱號向上的一策……一
一、學士論文制度を設けては如何……七
一、外國大學教授に勳章を贈與せられたし……九
一、醫師をして醫學の進歩隨伴せしめよ……一三
一、成功謝金……一三
一、尼僧をして看護婦を兼ねしめよ……一四
一、新に發見せられたる神經衰弱の原因……一六
一、娯樂論……二四
一、損害賠償……二八

一、基礎醫學者を厚遇せよ……二九
一、隨意轉學論……三〇
一、大博士の學位再設論……三一
一、シャアカン アソングー……三三
一、疾病傷害保險……三五
一、不死不滅論……三七
一、醫療器械に特許を禁止しては如何……四一
一、考案者に敬意を表せよ……四三
一、奬學資金……四五
一、褒賞條令の改正を望む……四八
一、雲のかゝつた眼……五三

一、學位請求論文に就て……五八
一、非學閥諸君……六三
一、商船模型を市内各小學校に寄贈するに就て……六九
一、鑑定料に就て……七二
一、一年志願兵制度の不備……七六
一、學位に對する待遇……八五
一、回覽感想錄中より……九一
一、濟生會の施療患者を研究材料に供する可否……九二
一、著述家諸君に望む……九六
一、學會に於る討論に就て……九九
一、野口博士と恩賞……一〇三

一、昭代の二大缺典……一一三
一、新發見の社會に及ぼす影響……一二七
一、神經衰弱症及近視眼の豫防法……一三四
一、醫師の廣告に就て……一四〇
一、官吏の暑中休暇……一四四
一、學術進歩の阻礙者……一四八
一、學校長と教授兼任……一五一
一、謹で各醫專校長を頌す……一五五
一、既往の業績と目下の研究……一六一
一、眼の衞生上から活動寫眞の可否……一七五
一、靖國神社國祭の議……一七七

一、トラホーム新根治法……一八四
一、眼を涼しくする法……一九五
一、春先の眼病……二〇〇
一、虎眼治療實習會終了に臨み……二〇五
一、暑中休暇の利用……二一〇
一、徒歩は絶好の運動法……二一三
一、菓子利用の新研究……二一九
一、眼の審美的價値……二二五
一、長時間の勉强に耐へ優良なる成績を得るには……二二九
一、近視眼は如何にせば治るか……二三八

以上

藪雀

稱號向上的一策

醫學博士 前田珍男子

近來醫師法が改正せられてから、新聞紙上に種々雜多な廣告がある。其中で一種の感じを吾人に與へるのは、醫師の廣告である。學位とか稱號とかを持つて居る人は左程でもないが、それがない人は、夫相當に苦心をして、其廣告案を作つて居るのである。それで醫師程肩書の必要を適切に感ずるものはあるまい と思ふ。現に辯護士たるも、醫師たるも、一種の職業名である。ところで、法學士たる身分を職名の下に書する適當の處置をとつて居る人は多いやうであるが、醫師たる人で「醫師」何々と記載せ

る人は、非常に稀れで、寡くとも、何々醫院、何々診察所の下に、單に學士とか、得業士とか、を標榜して居るのが多いと思ふ。かくも適切に肩書を必要とする醫師が、其社會に向つて廣告するにいかに博士たり、學士たるの利益あるかは、殆んど想像の外であるやうである。然ればこそ、我邦に在つて、博士たるは勿論、學士たり得ずして、而して其無冠の大夫に甘んじて居られぬ人々は、貴重なる金員を外國に携帶して、其渴望せる缺陷を補はんと努める樣である。是れ一見いかにも女子の虛榮に似て居るけれども、又一面獨り名譽を博せんと欲する念と、一面營利上大なる都合あつてのみの爲め計りでなく、又實に處世上の地位が學士以上たると以下たるとに於て餘りに多くの相違があつて、勞力の上にも、名譽の上にも、將た又營利の上にも、非常なる不遇と不利との境遇に在るのであるから、反撥的に奮勵を促がして、其位置に達し、寡なくとも、社會の有象無象をして、彼等と同等の位置に進みたる者と信ぜしめ得んと

欲するからであると考へる。かくの如くして、飜つて我邦近時の醫界を視るに、大學の數は增加し、尙ほ各高等學校第三部志望者は激增し、而して猶ほ各醫學專門學校の入學志望者は著く多數を算するの狀態にあつて、追年追月、醫師の生活難を覺ゆるは睹易きの理であるから、愈々以て實力の競爭とは云ひ條、まだ〳〵肩書の必要を感ずるは至當の事なりとせばならぬ。元高等學校醫學部卒業生に、「醫學得業士」なる名稱を附與せねばならぬやうになり。それが又校名附醫學士を附するやうになるのであつて見れば、時代の趨勢はまだ〳〵確かに如此種類の看板用肩書を要求するのである。宜なる哉、實際篤學の爲めでなくして、西航留學する人々の年々增加してゆく事や。

斯く變則(?)の要求のあるのは、其原因として、余は一に其進路の閉塞に因るのではあるまいかと思ふ。と云ふのは現今醫師の種類を大別したならば（一）大學出身者（二）醫專出身者（三）試驗開業者といつたやうに、其中の玉石混淆、官公私立等の區別

はあるげれども、先づ此の三種とする。そこで大學出身者は學士と稱して、一種類をなし、浮世的に第一流(?)の位置を占め、それが爲めに多少自から高く止り、他を輕視するといふやうな弊があるかも知れぬ。又第二流(?)及び第三流(?)たる人々の方でも亦多少猜疑、所謂ひがみ心を含むやうな事が出來て、一層其間に溪谷を作らせて、世人に誤解せられるやうな傾きがあるとしたならば、愈々各自の正札は世人の方から相場を附けられる事になつて、其含蓄せる實力、手腕等は、一向知られずに埋れ木となつて了ふ事があるのである。隨分所謂第三種の人でも、學士以上の實力を有つて居るものもあれば、又第一種のチャキ〳〵で免狀持つた人形さんのやうなのもあるといふ事である。則ち同一の階級に在つたからとて、所謂玉石同架で、篤學なのもあれば、試驗の爲め丈けに、學校に喰い付いて居つたといふのもある筈である。茲に於て囊中の錐であり乍ら、自づから穎脫する迄待ち居らずに、假りに前述べた階級として、開業

試驗の醫師にして、冠稱附學士號を要求の爲、論文を當該便宜の醫專校に提出して、詮衡の結果合格したる者には、其稱號を許可し、又其許可されたる者、若くは醫專出身の醫師にして、大學の學士たるべく要求する者には、論文を便宜の大學に提出させて詮衡し、是亦合格したる者は學士たるを得せしめ、醫學士は論文を提出して、其合格せるものは、乃ち博士たる學位を與ふるとせば、是れ實に閉塞せる進路を開通して、各自精鋭の技倆を振はしめ、野に遺賢あるの歎を補ひ、秀才の驥足を展べしめ、又實に國家有要の貨財を、外國に輸出するの愚を濟ふべきの良策ではあるまいか。この上尙ほ好學の人あり、篤學の人ありて、研鑽勤勉、學術の蘊奥を究めんと欲するの士あらば、それこそ是れ正に天下の材たるべく、洋行可なり、留學奬むべしであらうと考へるのである。

然し乍ら茲に說をなす人あり曰く、我邦已に博士たらんと欲するものは、其出身種

類の何たるを問はず、容易に其手腕を發揮して、論文を提出し、それを請求し得るに非ずやと。我邦の敎育制度は殆ど完備して、醫育の設備亦漸く完全ならんとしつゝあるの秋、爾の說の如くせば、却て敎育制度の秩序を亂すの懼れなしとせず云々と。然り大に然りと雖も、玉は瓦中に在りて著れ、鶴は鷄群の間に尊ばるるもので、現社會發展の程度が今暫く進步した曉には、或は却つて現制度にて滿足すべきも、現今前述の缺陷的要求がある以上は、吾人は邦家の爲めに、少しにても、無駄の金錢を費したくなく、又隱れたる有爲の士をして其驥足を展べしめて、一方には進路閉塞の爲めに自暴自棄に陷るやうな人々(あながち薄志弱行の徒計りでないと信ずる)を救濟したいと思ふ。そうすれば、國家の爲めにも利益がある事と信ずるのである。然し余はどこまでも余の案を主張するのではない。この意を以て、大方有識の諸士に謀るのであるから、幸に妥當なる立案が出たならば、余は實に滿足この上もないのである。思ふに

余一個の喜びには止るまいかと考へる。(明治四十四年一月一日醫海時報)

學士論文制度を設けては如何

前項に關聯して述べたいのは、現今の制度によると、醫科大學及醫學專門學校に於ては、卒業論文と云ふものなしに卒業すれば直ぐに醫學士若くは冠附醫學士と稱する事になつて居る。勿論比較的完全な學校で、一般醫學を履修したのであるから、卒業したら醫師たる事を認許するは尤もの次第であるが、苟も學士と云ふ特殊の稱號を與へると云ふ事に對しては相當の研究的業蹟がなけらならねばなるまいと思ふ。勿論卒業期のホヤホヤ連中に、獨創の新案があつて、大々的論文を草せよと云ふは、出來れば結構であるが、少々無理な注文かも知れない。それには學校の敎授が、適當の問題を與へて、指導誘掖すれば、出來る事である。これが爲に、敎授連中は、中々忙しくて、骨

が折れようが、教授として、學術の研究が專務である以上は、何も內職をする邪魔になるなどゝ云ふ人は一人もなかろう。學生は、之が爲に、注入的の學問でなしに、開發的研究的の頭が出來て、將來自己の發見なり、研究なり、其成績を發表する方法を知り、學界に貢献する事が出來る樣になるのであらう。又之が爲に、醫學雜誌に滿足の原稿が足りないなど云ふ嘆聲もなくなるあろう。

聞く所によれば、既に大阪高等醫學校は、學生をして盛に論文を作らせておらるゝとの事、誠に敬服の至りである。特に其論文審査料なり、若くは登錄料なりを徵收すれば、多端なる國家經濟の上にも得策であらうかとも思はれる。

今余輩は大學、專門學校の卒業者は、醫師たる事を得、而て後論文を提出して、始めて學士たる事を得ると云ふ事にしたいと希望するものである。（全上）

外國大學教授に勳章を贈與せられたし

我國官公私の留學生が、歐米諸大學にありて、多くの研鑽を積み、立派な業蹟を擧げて、錦衣歸朝の後は、日本學術界の先進者となり、指導者となりて、一世を裨益せらるゝは、誠に聖代の慶事である。慾を云へば、日本がもつと〳〵進歩して、こちらから留學するの必要がなくなるのみか、東洋諸國は申すに及ばず、其他方々の國から、我邦へやつて來るやうになつて欲しいのであるが、これは今直ぐに實現さるゝ話ではない。日本が後進國である以上は、彼國學術の精粹を吸收して、之を日本に移植培養せなければならない。これが將來理想鄕を一日も早く形成する唯一の方法であると思ふ。

そこで我輩の考へには、留學生が世話になつた大學教授とか、研究所の先生方へ、我政府から勳章を贈與して貰ひたいと思ふのである。大學教授が熱心な研究者に對して

材料を與へると云ふ事は、彼等の天職とは云へ、中々骨の折れる事であらう。これに對し、留學生が、足りない勝の留學費から工面をして、御禮をするよりも、大日本帝國政府から、勳章の贈與を受けたならば、たとへ勳六等の瑞寶章でも、彼等の滿足喜悅は蓋し意想外であると信ずる。勿論勳章は大切なもので、其濫授すべからざるは云ふ迄もないから、其人選、勳章の階級等に就ては、夫々其筋の御鑑識のある事と思ふ。此問題に就ては、陸海軍省の派遣者の上申に對しては、比較的都合よく行はれて居るさうであるが、文部省其他の留學生等には、未だ其便宜を聞かない。此一事は、堂々たる帝國政府が、外邦の學者を待つに、如何に禮を盡すかゞ判つて、後來の留學生が、多大の便益を得る事は必然である。

よく外國の使臣が來ると、其隨員一般に總花的に勳章が授與さるゝ樣であるが、國際間の問題から云つても、日本學術の進歩のためにも政府が如斯處置を執ると云ふ事

は至極適當の事で、又間接直接に利益する所が多からうと思ふ、敢て當局者の一考を煩はしたいのである。（仝上）

醫師をして醫學の進歩に隨伴せしめよ

（醫學講習會と十年目試驗法）

日進月歩の醫學に遲れない樣に、否各自の經驗によりて先人未發の研究をして、斯學に貢献すべき事は、醫師たるもの、日常心懸け居る筈であるけれども、日々患者の診療に追はれ、休息の暇さへなき多忙な開業醫が、よく新刊の書籍や雜誌に眼を通して、遺憾なきを期する事は、余程の篤學者か、或は一種の變りものに非ざれば、不可能の樣に考へる。かくて所謂流行醫は、昔學習した其まゝを眷々服膺して居る中に、學術は駸々乎として進歩する。一瞬間の惰眠をも許さない。即ち十年前に全盛を極めた先生も、不斷の修養を怠つた結果、否出來なかつたために、あはれ明治の漢法醫と

なり了るのも隨分少くないだろうと思ふ。醫師其人の不幸は勿論、之がために社會國家の蒙る損害はどれ位であろうか、之を救濟するの方法は醫學講習會の開設と、十年目毎に醫師を試驗する事であると想ふ。

大學や專門學校、又は立派な病院の連中が、醫學講習會を開催して、其蘊蓄を洩らして、開業醫に日新の醫學を敎授する事は、目下の急務であると信ずる。先年來京都醫科大學が、此種の事業に努力して居らるゝ事は、吾人の多とする所である。之と同時に、一方には、醫師を其開業後十年目毎に試驗して、新智識に缺けて居るものは、不得止開業を停止せしめて、相當の期間講習をなさしめたならば、前記の憾は除去さるゝ事と思ふ。勿論これが法律によりて强制的に施行さるゝと、多數の醫師は、大に迷惑な次第であらうが、こう云ふ人々にこそ、此方法を施す必要があるので、社會國家のためには忍ばねばならぬ。貴重なる人命を委任せらるゝ醫師が、いつまでも舊弊を墨守して居ては自己の天職を盡す者とはいへないではないか。（仝上）

成功謝金

醫師の第一の任務は、精確な診斷と、巧妙なる治療を施すにあるは云ふまでもない事である。處が現今の制度は、果して此理想的方面に向て吾人が進み得る樣に出來て居るであらうか。醫者は苦心して診察をする。それに向つての診察料は、有名無實で不得止藥代によりて之を代償して居る有樣は、宛然藥屋のそれの如くである。

社會の進歩と共に、醫藥分業が行はれて、醫師は全く診療の方面にのみ腐心し得る時期が來るのであらうが、兎も角此過渡時代に於て、吾人が職務を行ふに、充分其伎倆を發揮して、甲斐ある方法を提供したいと思ふ。それは茲に掲げた治療請負法である。かの辯護士が事件の依頼を受くるや、成功の曉には、手數料の外に、相當の謝禮

を約束する如く、醫師も診斷の結果、病症の如何と、自己の伎倆を信じたならば、患者と契約して、全治後に特別の報酬を受くる事にしたならば、正直で腕のある人々は、大に張合のある譯ではあるまいか。患者に一時的の慰安を與へんがために、病名を誤魔化したり、姑息的の方法を弄して、其日を送つて居る人々には、こんな問題は、絶對的禁忌かも知れないが醫師も實際予の主張の如くなりてこそ、却て俯仰天地に愧ぢぬ思ひをして、愉快に濟世の業に從ふ事が出來はせぬであらうか。（仝上）

尼僧をして看護婦を兼ねしめよ

（宗教慈善病院の設立を希望す）

いろ〳〵の不幸な事情のために、妙齡の女子が、圓頂緇衣の身となつて、佛門に歸依し、尼僧として、果敢なき一生を送ると云ふ事は、われ〳〵の屢々遭遇する所である。此等の人々が、社會の一員として、世のため、國のために、奮闘する事が出來ずして、遁世的生涯を餘儀なくせらるゝ迄には、色々の言ひがたき事情や、苦悶があり幾多の悲劇が演ぜられた事であらう。余輩はかゝる悲慘な運命を持てる姉妹に向て同情に耐えない次第である。けれども其尼僧生活をして居るものは、果して衷心からの滿足を得、愉快なる月日を送りつゝあるであらうか。又之がために、社會は彼等から幾何の恩惠を得て居るであらうか。余輩をして遠慮なく云はしむれば、彼等が憂き世を逃れて、念佛三昧に其日を暮らすと云ふ事は、畢竟消極的の慰安法であつて、そこに一の生命がない、又一の光明がない。御經を讀み、佛事に專心なるは、結構な事であらうが、實社會には何等の關係がない。云はゞ自己一身の安逸を貪る利己的生活であつて吾人の同胞としては、最も卑屈な態度ではあるまいか。直接家庭にありて、社會に貢献する事が出來なければ、他の方法によりて、其博愛慈仁なる精神を活用して、

人を愛し、世を救ふたならば、實に宗教の本旨に適ふと云ふものではないか。余輩は宗教には、全くの門外漢であるけれども、彼の獨逸國基督教徒の看護婦は、眞心をこめて病者に接するので、隱れたる大なる働きをすると云ふ事である。此例から云ふても佛教信者が厭世的生活をせずに、看護婦となつて自他の幸福を得られん事を希望するのである。余輩は又一回の宗祖の法要に、幾百萬の金員を投ずる本願寺の如き大勢力を有する教派が立派な慈善病院を設立したならば、實に愉快な事業が出來ると思ふ。靈肉併せ救ふと云ふ事は、最も必要な問題である、布教上にも大なる利益がある事と信ずる。（仝上）

新に發見せられたる神經衰弱の原因

嗚呼神經衰弱！　如何にして斯聲がかほどに高く響いて社會の素養ある部分を苦め

るのであらうか。曾ては有爲の青年を以て鄕黨に稱せられた秀才が、「嗚呼我は神經衰弱也」と叫んで競爭場裡の落伍者となつたり、一時は棟梁の才とまで世の囑目を受けた俊髦が、蠢爾として活社會の外に出でなければならないと云ふ其原因が、亦神經衰弱であつたりするのは、今日實に寡からぬ例であつて、これが追月追年次第に增加してゆくのは獨り其人箇々の禍のみでない實に國家の不幸事であるといはねばならぬ。

文化の進むに從て增加する斯病氣が一の文明病と稱へられて、天下に瀰蔓し行くのは生存競爭の激烈なればなる丈益々其勢を逞するのであるから、之を鎭滅しようと企て之を豫防しようと思つたからとてかの黴菌から起て來る傳染病を消毒防禦する樣な譯には行かぬので、事態から云ばゝ、それ等以上に戰慄すべき病氣と云ふ事が出來るのである。加之一度此病に襲はれたならば其經過が極めて緩漫であつて一張一弛容易に根治し得ないので、其病人は蛇の生殺しと云ふ狀態に陷つて、それに外圍からの同情

と云ふものがないから、愈々じれにじれて所謂自暴自棄になつて仕舞ふ樣な事になるのが多いのは、穴勝に薄志弱行と罪する譯にも行くまいと思ふ。

此病の本家本元たる亞米利加の醫師は、是れ人類の損害であると思たか、種々に研究をして居て感心にも斯病に對する諸種の報告をして居る。現に予輩の專門學科たる眼科の領域との關係に就きても研究をして居る樣であるが、醫學の本場である獨逸國に在ては之を輕視し、亦其獨逸醫學を崇拜する我日本醫界も斯方面の研索を忽にして居つたのは遺憾千萬であつた。

然るに一昨年來、當眼科院に來て予に診を求めた患者の中で、他の內科の醫師に受診して居つて、どうしても捗々しくゆかぬので、其醫師からの紹介で、篤と視機を檢査した結果。其視格の調整即適當の眼鏡裝用により調節機の過勞を輕減せしめた爲に忽焉として腦症狀が拭ふが如く治癒したのがあつて、其後注意に注意を重ねて精細な

る診察を施して時間を吝まず吾人の能力を使用つて嚴密に診斷する樣になつた結果は完全なる視力を有つてゐる人々にも、遠視や遠視性亂視の先天性の視格の變常が潛伏して居るのを認める事が多々あるので、私の方から神經衰弱の容態を列擧して、態とお尋ねをすると、何れも仰天せん計りにあきれて、誠に恐れ入ました、どうしてソレが、解りますかなど言ふ者が多い、そこで適當の眼鏡を處方すると丁度借金ならば元金を返濟したと同樣に忽ち腦病平癒の緒に就いて患者も大喜びである、如斯してこの忌むべき神經衰弱と眼病との關係があるのを確め得たので是を文獻に徵すると、矢張り本場丈けに米國の醫學界から斯種の報告が出て居るのを知り得たのである。

爾來澤山の患者中斯發見の見地から診斷を下し、それに因て治療を施した結果、明に癲癇が治り、偏頭痛が治り、ヒステリーが治り、綠內障が治り、斜視が治り、假性近視が治り、夜盲が治り、中心暗點症が治り、頑固の結膜炎が治り、職業不能が治つた

と云ふ風で、吾人は眼科醫として實に愉快に耐えざるのみならず、聊かにても是れが國家の爲、人類の幸福になるかと私かに喜んで居る次第である。かやうの實例の梗概につきては昨四十三年十一月廿日發刊の時事新報紙上に「遠視眼及亂視眼」と題して掲載されて、且つは又本年二月四日の大阪朝日新聞に「神經衰弱と眼力」の見出しの下に記載され幸に大に世上の注意を喚起したのを喜んでるる次第である。

私は如此實例を擧げ得たものであるから昨年大阪市で催された眼科學會の總會にて之を報告し、同業の注意を喚起して置いた。そうして私及私の助手河合、青木、西川の諸學士等が先日當名古屋での學會たる中央醫學會、及び好生館醫事研究會の席上で報告をして置いたのは載せて右等の雜誌にあるは勿論の事他に日本眼科學會雜誌、中外醫事新報、東京醫事新誌等に掲げてある。

以上畧述したる如き理山で、「我は神經衰弱なり」と自覺して居らるゝ人々は無論の事、又内科の醫師から貴方は神經衰弱であると診斷せられ居る人々及び御自身は眼力に何の變常もないと信じ切て居る人々にしても、どうも近來は「頭が重い」とか「上昇する」とか「眩暈がする」とか「頭痛がする」とか、「物忘れをして困る」とか、「馬鹿に肩が凝る」とか、何となく「不快沈欝で因る」とか、「職業が厭である」とか、「物事が厭きつぽくなつた」とか「近い仕事が出來難い」とか、若くはいやに「眠氣が催して困る」とか云ふ樣な容態に罹て居らるゝ方々や、若くは其家族なり、知り合なりに、さういふ風の人々があつたならば、私は一應素養があつて然かも職務に忠實なる眼科醫に就いて眼力殊に屈折異常の檢査を精密にして貰らう事を衷心から勸めたいと思ふ。寡くとも私の病院では、積年の苦痛を一掃し强壯になつたと云ふて大層喜んでおる人々が相當に數あるのである。

一概にどれもこれも悉く神經衰弱なり又所謂腦病なりが視格を矯正したので治癒す

ると云るのではない。今では素人も既によく知る如く神經衰弱の原因は多方面であるのであるから、其何れから起たと云ふ事を確めるのは六ヶ敷事であらうけれども、それと同時に視格が正常であるか否やを檢査して貰ふ事の、餘り六ヶ敷事ではないと思ふのである。

兎に角屈折異常の爲に神經衰弱が起て來ると云ふ事は日本で唱道するのは前にも言つた樣に、新しい事實であるから、隨分世間によくある例の、本人自身の眼力は惡くても、全々先天性の變常であるから氣が着かないのと、又よし遠見は人並に見へても遠視は潜伏してをるから、健全な方と比較研究をしない結果、腦が惡くなつたから保養でもすればよかろう位で、閑却して置く人々が多い樣であるし、又資力の寡ない人や位置の高くない人などでは斯變常のあることの自覺は勿論の事、主人筋の人からは、「怠惰者である」とか「お眠り」とか「役に立ず」とか云ふ冷罵を被つても、じつと

辛抱して不愉快な月日を送らねばならぬ樣な事もあらうし、或は又學生諸君であつて見れば、病氣の爲に如何に勉强するとも好成績が得られず、さらばとてあせりにあせつて、愈奮勵すればする程神經過勞となつて、愈不出來になり了り、終には大切な身體までも弱くすると云ふ悲慘な境遇になるのが隨分多い事と信ずる。かゝる種類の方々が、一朝視格を矯正して其屈折異常に適合した眼鏡を懸けた計りで、忽ちに積る苦悶の雲晴れて活々した忠實なる傭人職工となり、元氣旺溢せる好學生となつた例のあるのは、前に申述た通りである。これ等は僅少な端した錢で生命を買た樣なもので、全然箇人箇人の喜び計りではあるまいと信ずるのである。

實際右述べた容易い事で（眼力の檢査を確實にするには寡くとも二三時間を費すので、醫師は可なり骨が折れるけれども）患者にとつては實に長年の苦みや、不愉快な容態が取り去られるのは、所謂腦病患者の諸君にとりては、意外の福音で眞に空谷に

跫音を聞くと云ふものであろうと考へる。（明治四十四年三月十五日實業之日本）

娯　樂　論

人誰れか娯樂無からんやで其趣味の赴くところ千態萬樣各種々の娯樂を有する、娯樂若し慰安たらば其各種の娯樂其者が各自の發展に向つて又それ相應の刺戟にもならう。娯樂若し道樂たらば本業以外特に何等の道樂を要せねばなからうか。若夫れ平易に道樂と誤解せられつゝ實は各其人の慰安たるべきものを娯樂と稱すとせば吾人は强ちに各人各個の娯樂の種類に向て攻擊嘲罵すべきものでない事は充分承知して居る。そこで人としての娯樂に就て余がよく質問を受くる場合は、玉突はどうです、謠曲如何、書畫骨董は、碁將棊は、酒色如何、蓄財如何、まづかゝる種類である、かゝるものが吾曹相應の娯樂なるものゝ選良種類とせば余は實に不幸にして一の慰安的道樂なき無味

乾燥の肉塊に過ぎないのだ。

然るに天は尙ほ予を捨て給はざるにや、余には大々的娯樂がある。其を何とかなす、曰く予は予が本職たる醫業そのものを限りなき好良の娯樂とするのだ。予は自然から授かつた運命の儘に自己の職業に滿足するものゝ一人である限り、其結果予の命令や勸告に從つて吳れぬ患者には全く同情の餘地を存せぬことになるからさう云ふ患者は一切謝絕の方針を採つて居る。彼の世にありふれた口實や手段を以て患者を胡魔化す事などはどうしても性に合はないので、予が信ずる人道の上には到底一致せぬのである。かういふ風の見地で自己の本義を唯一の娯樂と確信し其主義の勵行を努力せる以上却て金錢の上にも大なる執著無く治療の上に嶄新の工夫を積み得るに至りしを自覺するので、斯て學術の研鑽も出來、臨牀の成績も向上すべき筈である。

昨四十四年七月に時事新報社が調査して發行した全國中に於ける五十萬圓以上の資

産家の表を見ても其中で醫師の數は僅かに屈指に過ぎぬのに徴しても、醫者が如何に死物狂ひで稼いだとても高は知れて居るのだ。金が欲くば商人になるが近道ではあるまいか。又折角千辛萬苦の結果積み上げた金銀財寶も其用途を知らず詳言せば活用せずに只利子を産ませる計りならば何が爲に學問をし修養をするといふ事になる。要は大に活動して大に其結果を應用せねばなるまい。さあ、此點に於ては其本業を娯樂とせるものに於て初て其理想を現實し得べきであると、予は確信するのである。況んや其將來するところ利用厚生の道に適つて末は御國の御爲になるべきに於てをやである。

此見地にあつて予は狂者染みる位家業に熱中し且自から奉ずるに薄からんことを熱望し少しにても患者の治療法の改良に努力し其効果の多からんをのみ工夫して惟れ日も足らずである。又、右の立場からして予は何物を儉約しても人材を作り出したいと志して居るので、海内は申す迄もなく海外に迄予の助手連の留學をさせてあるのは全

然此素志を達したい計りの企てゞあるのである。

熱狂の程度も、既に自己の慰安的道樂として之に臨むのであるからは並外れて居るのは當前である。隨て其發企の當時に於て世間から狂人染みて居るなどゝ謳はれたのも亦其筈である。然し熱狂は既に道樂慰安たる以上は其進歩も亦熱狂的速力を以て走り終に破天荒の好結果を生み出すのは容易に首肯せらるゝ事だろうと思ふ。又實に其通りであるのは。僅ながらも予の小業績に徴し予はこの信念を持續けたいと願つて居るのである。

又更に予の知人に極めて器用な人があつて、手品で御座れ、自轉車曲乘で御座れといふ風なのがある。若しこの種の人が予同樣其業務に熱中したならば、否、其慰安的道樂を其本職に求めたならば、如何に素晴ちしいものが出來上るであらうかと染々惜しいやうな心持となるのである。

予の崇敬する一友が「世人は學問に忠實なる人が乏しいと嘆ずるが、僕は却て眞性の臨床家の乏しきを慨く」と云つた。予は臨牀家として世に立つ以上は斯言を聞捨てにする譯にゆかぬ。聞捨にせぬ以上はどうしても其本業に熱中し其間に慰安を求むるのが大切だと考へるのである。乃ち、敢て大方開業醫諸君に質したい。（明治四十五年一月一日醫海時報）

損害賠償

人が他に損害を及ぼす程の損失をした場合には其被害者に向て相應の賠償をする義務ある事は民法第七百十條に定むる處である。近來屢々同業者が前後して訴廷に要償されて居るのも何れも原告の敗であろうが、一時性に該當者の打擊は想像以外であらうと思ふ。近時文明の進歩と倶に法律思想の普及に因つてかゝる要求は簇生するだろう。果して然らば其罰を餘義なくせらるゝと同時に其償をも確實にする必要はより以上でなければなるまいか。だから予は昨年初刷の本紙上記載した或成功謝金要求が最も適切に喚起せらるべきであろうと思ふ。世の中は左樣に偏頗なものではない。吾人の私見が實現せられねばならぬやうになる時期は恐らく必ず到來すると信ずる。（仝上）

基礎醫學者を厚遇せよ

「人生基礎醫學者となる勿れ」とは一般に耳にする所だが假にそれは其待遇の薄きを謂ふものとせば吾人は實際同情を寄せるに躊躇せぬ。如何に篤學熱實の人でも顧みて內に患あるやうでは十分の手腕を發揮することは六ヶしいものであらう。資產ある學者が從事して居らるれば結構なるも十人が十人皆な黃金家の基礎醫學者とは行くまいではないか。

勅任の大學教授でも年俸僅かに三千圓内外他に著書でもある外一切餘祿なしといふ有樣。地方の醫專に解剖生理等の教鞭を執れる人々の中に或は不愉快な日を送れる無きかを危むのである。口善惡なき京童共からヤレ意氣地なしとか、潰しが利かぬとか、沒常識の冷評を浴せかけられながら、物價は騰貴する交際は擴張する終に生活困難となり世間並の交誼も結び難くなる、其餘勢或は完全の研究を爲し得ざるに至らぬかを危むのだ。

一面醫學が冲天の勢を以て進歩しつゝあるは要するに其基礎醫學の研鑽宜しきを得たる結果だ。天下幾萬の醫家は正に其恩惠に因りて治療の發展を得つゝあるのだ。故に規則を改むるなり、官制を更ふるなりしてどうしても、此基礎醫學者を特別に優遇せん事を切に希望するのである。（仝上）

隨意轉學論

事或は大に失するかも知れぬが、我邦の學制―寡くとも我醫育―に就いて考ふるに現在はどうも學校本位ではない。學生が或事情の爲に他へ轉學を希望するも容易に認可せられぬ。が、余は之を許可して隨意に隨處に轉學聽講さするやうにしたいと希望する。學生が世論を信じて或校に入學せしに其校に噂程の教授なく、聽講を欲せぬ場合にも他校へ隨意聽講にゆかれぬのは不都合ぢや。故に大學は各大學を通じ醫專は各醫專を通じて（其中醫育統一が現實せられたらば悉くを通じて）自由の智識の吸收を許すやうにしたならば學生が羈絆を脱れて充分に活動し得るやうになるであらうと信ずる。寡くとも學生各自にとりては幸福であらう、學生の幸福はやがて國家の幸福であるべき筈である。（仝上）

大博士の學位再設論

青雲の志は誰しもある、殊に我醫學界に於てはまだ〳〵肩書全盛期の一幕中である。然れば論文提出學位受領を希望するもの相踵ぐのも當然だ。滔々たる天下比々斯實冠(?)を項かん事に憧がるゝは其提出論文が文部省に絶えないのを見ても明かだ。洵に盛代の美事國家の慶事である。予は其提出者の愈多〳〵して、其受領者の益々寡からざらんを切望する。然し其受領者が掌中已に花を得たる以上最早其花を散らすかは知らぬが尙一層培養を怠らざる人が寡いと思ふ。於茲、堅忍持久學術を砥勵せんと欲しつゝある人を表彰する一種の刺戟劑が必要だ。此興奮劑の處方は「大博士」の學位を再設するに限ると思ふ。勿論ソノ場合には斯尊き學位を一屬僚たる大臣の名によらずして、陛下の御名の下に行はれんことを希望するのである。猶其上にも或は叙爵なり或は表彰なり何なりとも學者厚遇の方法はあるべきであるからドシ〳〵其實行を希望する。最も公人と私人との別をせぬ樣にするのは云ふ迄もなき事である。（仝上）

シヤアカン　ア　ソン　グー

格堂生氏は去四十四年十月の「日本及日本人」に表記の問題を記載せられたり。一讀趣味津々、人世に稗益するを覺ゆたるを以て左に之れを轉載せんとす。畢竟するに創見を抱ける人の躊躇逡巡しつゝある間に人に先ぜられて嚙臍の悔あることあるを戒めたるものか。予私かに思ふ、賢者達人といふも田夫野人と稱するも其腦力の程度大なる相違あるべきにあらざるべしと。さらば此章を讀む人、遠慮は損慮或程度に見切を附け其業績を發表せよ。徒らに功を他人に奪はるゝ勿れと勸告したい婆心からの轉載だ。乍然充分愼重の態度を執て貰ふは勿論の事で決して輕擧を慫慂する次第ではない。

「佛蘭西人は屢々、シャアカン、ア、ソン、グーといふ言葉を使ふ、各自其趣味を持つとい意ふ味である。此語を我眉の上に懸けて他人を見るから、他人が新奇な風や、

異樣な裝をして居ても喧しく騷がぬ。人は人我は我と冷眼に附し去るから、他人の疝氣を吾頭痛に病まぬのだ。

銘々皆自分の趣味で存分奇拔な考を出し他人の恐れどころか却て周圍に影響を及ぼすを歡ぶといふ風がある、流行などを見るとよくわかる。始めは隨分變挺だと見られたものが、見る間に歐洲全體の流行となるなどは、つまり批評を構はず行つて見るが爲めだ。構はずやるのが佛蘭西人の一氣質である。時々大に失敗するが、當る世界的になつた例は幾らもある。

日本人は他人が何か少し奇拔な趣向を凝すと、周圍から嘲つて仕舞ふ。丁度田舍の犬が旅人に吠つく樣に吠つく。だから折角頭を出しかけたものでも、多くは嘲笑の底に葬られ苗にして秀でざるものとなる。迂濶に出しやばつて頭を打たれては損だといふ氣が誰の頭にもある。其癖何か流行り出すと直ぐ眞似をする。

今後は可成他人の疝氣を頭痛に病まぬ樣にして「一つ行つて見やう」「一つ試して見やう」といふ氣分を一般に增さしめたいものである。（仝上）

疾病傷害保險

世局の大勢に伴ひ經濟の狀況漸く革まるに際し、社會人士の不健康に陷擠するの狀態は倍々其度を加ふるに至れり、爰に於て人道上及社會政策上醫療の普及、貧民救療及醫事經濟の方法等は刻下の最大問題とはなれり。

明治四十四年二月畏くも恐れ多き　今上陛下は勅語を賜ふに內帑金壹百萬圓を下し給へり、無克の窮民にして醫藥給せず天壽を全ふする事能はざる者に施藥救療の道を拓き給ひしは、吾人臣民たる者の唯々聖恩の宏大無邊なるに感泣措く能はず。

陛下の慈仁によりて成れる濟生會の事業も倍々其步を進め遠からず其實施を見るに

至らん爰に於て貧民救療問題は幾分濟生會の事業として解決を遂げ得べしと雖も、未だ以て一般社會の津々浦々迄も醫療の普及せりとは云ふべからず、斯くの如き時に於て一般國民は安閑として成す所なく、唯聖慮をのみ煩し奉るは國民として不忠實なりと云はざるを得ず、宜しく余輩が望む如き方法により各々自治の精神を修めざるべからず、即ち疾病傷害保險制度により强制的に所得稅を納めざる者に一日一人に對し一厘宛保險の懸け金を成さしむるにあり。然る時は一朝外傷若しくは疾病に罹れるの日充分なる醫療を受くる事を得せしむるなり。今日本の人口五千萬人として其内一千萬人は富有なる所得納稅者と假定して殘り四千萬人は均しく毎日一厘宛の支出を成せば一ヶ年の懸金實に一千四百六十萬圓の巨額に達せずや、之を一定の年限間に亘り貯蓄し以て全國に相當の設備を施さば外傷若しくは疾病に罹れる者を完全に收容せしめ、最善の醫療法を講ぜば個人として幸福を得るのみならず、一方に於ては獨立的思想を

養ひ、又國民經濟上好個の實を擧げ得べく、國民の健康上に一致の安泰を期するものなり。畢竟するに如斯零細の金員を以てしても共同一致せば意外の巨額を算し、且つ依之視是此種の方法は容易に設け得べきは勿論、實踐躬行の美を見るに難からずとするものなり。今や脆弱なる貧民救療問題の八ヶ間敷時に於てをや、國民は如斯自治的團體の保險制度たるもの丶出現を怡悅し、亞いでは斡旋の勞を燼すべきものなり、何人も疾病に對しては恐悞する所なれば此制度に依り醫療方法の安泰を期するは、之れ實に社會國家の重要問題として益々研究すべき事ならずや。（明治四十五年六月七日關西醫界時報）

不死不滅論

「人間五十年、げてんの中を比ぶれば夢幻の如くなり、一度生を享け滅せぬ者のあるべきか」

「死なうは一定、忍び草には何を爲よぞ一定語りおこすよの、」

凡そ生あるものは必ず死せざるべからず。人生長きものと雖も百歳を超ゆる者は多く之を聞かず。然らば吾人は此の僅かの年月を如何に處すべきか、例令巨萬の富を藏し或名一世に趨せて世に時めき〳〵者と雖も、一たび死の運命に遭遇せば即土塊に化せざるを得ず。其死後大なる碑石を建て銅像を設けて之を永く記念せんとするも、其當時は流石に之を訪はるゝものありと雖も幾多の春秋を經て碑面青苔に沒せらるゝに至る時は勿論、尙墳土未だ乾かざるに已に漸く閑却せらるゝを常とす、於茲てか其人は名實共に亡びたるなり。嗚呼吾人はかくして遂に滅せざるべからざるか、若し然りとせば吾人は實に宇宙間に於いて其一瞬間のみ現はれ忽ちにして消ゆる流星の如きものなるべきか。さはれ人は必ずしも死滅すべきものに非ず、即例令肉體的には死するも精神的に死せざるものたるを知らざるべからず。夫の「虎は死して皮を貽し人は死して名を

留む」てふ語の如く、若し永久に生きんと欲せば其在生中に偉大なる事業をなし、其功をして千載に不滅ならしむるを要す。吾等若し生を此世に享けて何等爲すこともなく。醉生夢死に終らんには禽獸と撰ぶ所なく人として最も愧づべきことに非ずや。楠公の肉體は死せども公の精神は我等日本臣民の腦裏に長へに深刻せられて、永遠に忠誠の生命を保ちつゝあり。例令長壽を保つと雖も在世中國家社會に何等貢獻する所なかりせば、其生命や何等の價値なく常に活動して國家社會のために盡瘁する者は、例令早世するも尙遙に彼に勝れり。故に吾人は强ち肉體的長壽を欲するものに非ずして眞の長壽、即生存中に於ける活動時間の長短、並びに其事業の大小によりて定めらるゝものなることを信ず。乃木大將の肉體は死したれども世に忠君愛國の大義の存在する限りは、大將遂に死せずして感化の及ぶ所精神の亡ぶることなし。我醫學界に於いても夫のヘルムホルツ、グレーフエ又はリスタア、コッホ、パストーア氏等の如きは、

例へ死すと雖も其功績千載不滅にして其業績の世に傳へらるゝ間は尙精神的に活動しつゝあるものと云ふべし。我北里氏の如きも亦然りとなす。是等諸氏の如く卓絕せる事業をなし、所謂人類社會に偉大なる福音を與ふるは實に之人生の最大快事にして、又人類として最大美事に屬す。而も是又眞に人生の不死不滅を證明せるものなり、故に若し我名を永世に傳へしめんと欲せば、即永久に生きんと欲せば、能く大に國家社會に寄與する所なかるべからず。徒らに巨萬の富を積むに汲々とし、若くは無意味に生活せる者宜しく大に活動して不死不滅の道を講ずべきに非ずや。謂ふ所極めて平凡なるも、尙ほ吾人是を現代醫學界の趨勢に鑑みて適切に之を唱道するの必要あるを覺ゆるを以て、敢て胡蘆の笑を招くを知りつゝ我學界の一顧を乞はんと欲するなり。

（大正二年一月一日日本醫事週報）

醫療器械に特許を禁止しては如何

元來特許とはある人の考案によりて造られたるものゝ製作に關して他人より優越なる權利を認められるを云ふ。之其の人の創案に對する報酬で、其考案者はかゝる優越權を認められるのが至當であるかも知れぬ。然れどもその考案者が營利を目的として造つたものとすれば別にいふべきこともないが苟も社會を益し、公衆の便利を圖りたいといふ目的で之を考案したものであつたならば、宜しく世に之を開放し其考案品の頒布を圖り以て其利用を普からしむべきものである。殊に醫師の如き仁術として認められ只其職務に努力し不幸なる傷病者を救濟することを之つとむべきものに於いて然りである。自己の考案せる醫療器械が幸に優秀であるならば、之を普く刀圭社會に提供し其利用を受けしめてこそ其の考案の本來の目的を達せられ引いてよく我醫學上に一進

歩を與ふるものである。然るに世の多くのもの己れの考案せるものなりとて又甚しきに至りては先人の考案を僅かに變更し己の創案したるが如く裝ひ爭ひて特許權を得んことに汲々として居る。彼等は其考案器若くは改良器によりて廣く世を益することを望まずして只自己の利のみを圖るのである。身商人にありては或は自營上必要なることかも知れぬが、苟も仁術を標榜して世の救濟を圖らんとする者ならば己の考案品が普くその刀圭界に持て囃されるのは醫學上の進歩として愉快に堪えぬことである。一般社會に於ける種々の特許は望ましからざることであるけれども余は殊に醫療器械に於いて痛切に之を感ずる者である。宜しくその特許を禁止し只その考案者への義務としては適當の方法によりてその功を表彰し且其功をして永久に不滅ならしむべきである。爾れども吾人の云ふ所は特許條令の明文に示すが如く特許の禁止は既に醫藥及其調合法に及んで居るから之と殆ど同一の範圍に屬する醫療器械類にも之を及ぼして禁止したいと考へる。（大正二年一月一日醫事新報）

考案者に敬意を表せよ

凡て物事を創案するといふ事は些細な事でも中々六ヶ敷い者である。人が創成せる後で夫を見れば何でもない樣な者であるが、自分で考案して作らうと思ふと中々苦心の要るものである。殊に卓拔なる療法診斷法及手術又は複雜な醫療器械及之に伴ふ運用などは非常なる苦心の結果で出來たる者と云はねばならぬ。されば其療法又は器具に其考案者の姓名を冠せるとか、或は又適當なる方法に依て其考案を記念し、以て其功を滅せざる樣に圖ることは、其器械を使用し其惠に浴せる者の、考案者に對する當然の義務と云ふべきである。歐米諸國に於ては此事は多く行はれて居るが、我國にては一向行はれて居らぬ。是名譽を他人に與へることを惜む所の島國的根生に基くので

はあるまいか、又我國では外國人の考案せる物であると其姓名を冠らせるが、邦人の創案にかゝる物であるとそうでない。之は一體如何なる譯であるか、斯くの如く本邦人の名前を冠らせた療法若くは器械等がない時は、恰も我國には一として邦人の考案せる物がない樣に見え、他國に對しても實に恥しい次第である。我が國人は其考案者の功を表はす事を知らざる者、又は敬意を表する事を知らない者といふことになる。何も外國人の創案計りを稱へる必要はない。我國人の創案せる物も立派に曰く何々氏療法、曰く何々氏――として稱へ、外國へも知らしむべきである。又此創案といふ事に關して、今一つ我國にて忌はしきことが行はれて居る。例へば或人が苦心して考案したる機械があれば、其原理を取りて或は少し形式を換へ、又其の器具に僅微なる改良(?)を加ふるのみにて、恰も己が考案せる物の如く、何某――等と事々しく稱せしむるのを見るが、是は恰も他人の名譽を奪ふ樣なもの

ので、自ら人格の下劣なるを標榜するに等しいと云はねばならぬ。而して其立案者に對して不敬なるは云ふ迄もないことで、道德上不德の誹を免ることは出來ない。故に考案者に對しては必ず充分なる敬意を表し、若し夫に改良を加へたるものなれば、其説明を加ふべきである。(正大二年一月一日醫時公論)

奬學資金

志あるものは事竟になると、古哲の言へるは實に然る事なり。之れ堅忍不拔の志を立て之れを遂行せんには、良く萬難を排して其目的に向つて猛進するの勇あればなり。身赤貧洗ふが如くなりと雖も、苟も堅實なる志あるものは、遂に成功の彼岸に達するを得べけん。然りと雖も、將來ある者にして修學の資なく、苦學の結果徒らに身神を過勞し、將に世に出でんとするや、奮起するの精力既に盡きて、多年の苦心水泡に

期すること世間其例少なしとせず。若しかゝる者に對し、その修學時代に充分の餘裕を與へ、後來活動の資を貯へしめば、彼自身の幸福は固より、國家の爲め社會の爲め多大の利益たるや言を俟たずして明かなり。家巨萬の富を藏し、修學の外に餘念なきを得るものと雖も、彼れに於て自ら奮勵努力することなきものは、成業の見込なく彼に向て多額の敎育資金を投ずるは、之れ國家社會の損失と云はざる可からず。南天躑躅等は如何に肥料を與ふるも矮少たるを免れず、之に反し、松柏杉檜等は之を自然の儘に放任するも喬木たるを得べく、而して若し之に充分なる養分を供給すれば、その成長速かにして遂によく亭々たるの偉大をなさしむるを得べし。是れと同じく、例令貧縷なるものと雖も、性來天才を有せるものは、他より之に補助を加ふることあらば幾多の困難に打ち勝ちて、成功の域に達するを得べし。若し之に適當の資金を與へ修學に熱心ならしむるを得ば、貴重なる精力を徒らに費すことなく、一層速かに且つ充分

に己の力量を發揮せしむるを得べし。

夫の有爲の志を抱き、偉大なる天才を持ちながら、貧なるがためにその素志を貫き嶄然として頭角を現はすを得ざらしむれば、之黃金を瓦礫の中に埋むるに等しと云ふべし。彼をして修學の資を得、奮勵努力せしめなば、恰も蛟龍の風雲に乘ずるが如く其進歩著しく、而して一度社會に出でて活動するに至らば、世に貢獻する所偉大にして、國家社會の裨益や又測り知るべからざるものあり。新進の日本、天才を要する切なる秋に際し彼等貧窮の天才をして其伎倆を發揮せしめ、適當に用ゐんには、之其器を利用するを知るものにして、蓋し最良の方法たるを失はず。然らば、如何にして彼等天才をしてその伎倆を發揮せしめんとするか。曰く、奬學資金なるものを設け、以て貧窮なる有爲の青年をして勉學の資を與へ、其青年時代に於て充分の修養をなさしむるにあり。身高位高官にありながら、素行治まらざる似而非紳士が、攀柳花折の費

を一回省き以て奬學の資金に供したらんには、其効果の現はる所實に豫想外ならん。上下一般に奢侈の風を矯め、有志のもの相寄りて、僅微なりと雖も之を積み、或はその村落に於て、或は其都市に於て、或は又特種の團體に於て、奬學資金を設け、以て學資支給の方法を講ずるは、國家將來のため極めて緊要なる手段なり。吾人は國家社會の一員として何等か之れがために報いざるべからざると同時に堅實有用なる第二の國民を養成して、將來に資するは、之又重大なる吾人の責務と云ふべきなり。誰れか奬學資金の設置急ならずと云ふか。（大正六年一月十五日日本之醫界）

褒賞條令の改正を望む

從來國家は慣例上人の慈善的事業を經營し社會國家の利福を增進する者、又は醫師として貧者藥治の料なきものに施療を行ひ仁術の惠澤に浴せしむる等の獻身的事業を

行ひたる場合に於て、金銀木杯其他の恩賞を與へつゝあり。如此公賞は、正に宜しく三拜して之を受領すべきものなりと雖も、若し吾人をして忌憚なく云はしむれば、是等の方法以外何等かの表彰をなすに及ばざるなきか、吾人は宜しく之等の功勞者に對して、尙適當なる表彰の方法を講ずべき餘地あるなきかを思ふものなり。之等慈善的若くば救濟的事業を經營するものゝ多くは、已に幾多の資產を有し、其資財を擲ちて之を行ふ以上は、自己の利益等を顧るものに非ずと信ず、さればかゝる僅少の恩賞金等を得るを以て、之を其事業の補助となすべきに非ず、又夫の金銀木杯等に至りては單に記念と云ふ外、殆んど無意味の物たるなきか、特に其禁酒を守れる人等に於ては却て無用視するものあらん。豈獨り余輩酒を嗜まざるの故を以て此言をなすものならんや、況んや元來斯かる恩賞に預らんと期待せざる彼等慈善家に對し、斯かる表彰をなすは、彼等の寧ろ好まざる所たるに於てをや。吾人は如此物質的報酬を廢して、精神

的に名譽の表彰をなすを以て適當なりと信ぜんとす。

顧みて我國に於ける褒賞條令を見るに、綠綬、藍綬、紅綬等の區別ありて、或は殖產工業を興して民福を圖り、又は危險を冒して人命を救助する等の功勞ある場合に之を授與することに規定せらる。是實に其功をして、永久に不滅ならしむるものにして、其名譽を表彰するに最も可なるものなり。然れどもこの條例に該當するに足らざる程度の美擧、又は一時的の機會に於ける功勞等に對しては、直ちに之が適用を濫りにすべからざるが故に、或は從來の如く、金銀木杯、恩賞金、褒狀の如き一時的表彰の方法も亦可なるべきも、苟も私財を擲ち、獻身的に世を救濟する所の之等の事業に對しては、かゝる一時的表彰は、必ずしも方法の最良なるものと云ふを得ず。若し他に相當の形式非ざれば乃ち止む、然らざる以上須く褒賞條例を改正し、其種類を設け、以て其褒賞授與の範圍を擴張し、之を是等事業の功勞者に及ぼさば、其經營者の滿足之

に過ぐるものなけん、かくして其恩賞其宜しきを得たるものと云ふを得べきが故に、吾人は茲に褒賞條令を改正して、上記の如き適當の恩賞法を施行せらるゝことを切望せざるを得ず。或は云はん是等の善行者は素より何等報酬的表彰を思はずして之を爲すもの、恩賞は國家が其人格事業を認めて之を行ふものにして、自然の結果たるのみ、何ぞ其方法如何を顧慮せんやと、然り。然りと雖も、己に褒賞條令の存在する以上、相當の方法を設けて之を適當に且つ有益に應用する又無用の議ならざるに非ずや。試に我邦褒賞條令を細讀し、其紅綬章の主旨に就きて見るに「自己の危難を慮みず人命を救助したるものに賜ふものとす」とあるを知る。醫は其危險を顧みずして、猛烈なる傳染病者及其病毒と每常戰ひつゝ其患者を救助し、若くば國家の損害を豫防しつゝあるものにあらずや。固是職業の上に來れる當然の結果なりとすれば、夫れ迄なれども、不幸其病毒に感染して發病し、終には斃るゝ事往々あれども、國家は未だ之に向

て何等の表彰ありしを聞かず。軍人職に斃るゝか、或は危險を冒して相當の功績を致す。即ち特に定められたる金鵄勳章なるものありて、優渥なる恩澤に浴することを得れども、醫師は其戰時と平時たるとに論なく、居常常に無形の敵と奮鬪して其職に斃るれども、何等相當の表彰を得るに至らず、醫師にして從來紅綬褒章を得たるもの果して幾人かある、吾人寡聞未だ之を知らざるを憾む。

又其藍綬褒章の規定に見るも「學術技藝上の發明改良、著述、敎育、衞生、慈善、防疫の事業、學校病院の建設云々」とあり、醫師にして其學術技藝上の發明及改良をなせしもの寡からず、社會を裨益するに足るべき著述なせしものも亦寡しとせず、殊に衞生防疫の事業に就きて功勞あるもの儕々として多士なるに非ずや、夫の志賀博士は赤痢菌を發見して得たるところ僅かに勳六等たるのみ、世人を聳動せる「サルブアルサン」の發見者秦博士が贏ち得たるところ亦正に勳五等に陞叙せられたるに過ぎざりしならずや。北里博士の如き青山博士の如き其偉功あるもの縷指に暇あらず、然れども終ひに我醫界未だ如此理由の下に、藍綬褒章を獲たる人あるを聞かず。

或ひは又褒賞條令に該當するは、其量に於て著明ならざる可からず、其授與を濫りにすべきものにあらずと云ふか、前述の如き種類の事績、尙ほ且つ之をしも分量に於て不足なりとせんか、吾人は其如何なる程度のもの則之に適當すべきものなるかを疑はざるを得ず。殊に前記殊勳者の諸氏の如きは、身已に官斑に列しつゝありしものにして、在野の功勞者に至りては、微々たる一勳章すら授與せらるゝ便宜を缺きつゝあるが如き感あるは、國家を裨益して其發展を企圖するの上に於て、頗る遺憾なるものありと思考す讀者以て如何とかなす。（大正二年一月十八日醫海時報）

雲のかゝつた眼

（角膜割刺術の視學的價値）

近頃世界の學問の發達に伴れて我が醫學界の進歩も實に目覺しい程であるが併し夫等は大抵西洋の眞似で、本邦人の發見發明に依つて世界の學説に變化を來たしたとでも云ふやうな事は殆ど數へる程しか無い。ところで私が茲にお話をしやうといふのは甚だ小さい事柄のやうで、且つ聊か手前味噌のやうでもあるが、實は歐洲先進國の學説を變化せしめたものである。

諸種の色素を以て角膜を染色すると云ふ事は、古くから判つてるので、寧ろ著名な事であるが、併し夫れは只裝飾的に行つてゐたに過ぎない、尤も千八百七十一年（今から四十一年以前）に佛人ウェッケル氏が、視力を恢復するために初めて此の方法を應用した事はあつた。然し其の成績が良くなかつたものか乃至試驗の證明が不滿足であつたものか、何れにしても其後信用が薄くなつて、近來は如何なる教科書にも、

此の角膜の染色といふ事は矢張昔の通り唯裝飾用にのみ應用す可きものとして記載せられてある。

元來角膜が外傷を蒙るなり又炎症を起したりして、角膜に雲なり星なりの痕がついた時に（無論其程度にも依るが）之を完全又は完全に近く治癒せしむる事は、現在の醫學では六つかしいのである、而して其の小斑點が瞳孔の領分に這入つてゐるか又は瞳孔の境まで擴がつてゐる時は、愈以て視力を害する事甚だしいのである、とは云ひ乍ら既に殆んど完全に近い程度迄に視力を恢復する事が出來るといふ例證があるとすれば、只治療が困難である全癒が覺束ないと云つて此の角膜染色の價値を沒却し、之れを一片の裝飾視するが如きは、果して忠實なやり方であるであらうか。

半透明の斑點と不透明の斑點と、何方が多く視力に影響を及ぼすかといふと私の實驗の結果にすれば普通想像されるとは反對に寧ろ半透明の方が多いのである、試み

に平面の硝子板に一つは糊で點を描き、も一つは墨で以て同じ樣に點を着け、夫れを眼の前に持つて來て、克く較べて見るとその糊で書いた半透明の斑點は、墨で書いた不透明の斑點に比して大に視力を害する事實が判る。

以上の簡單な試驗でも判るが、尙之れ丈けでは不滿足の虞があるから、私は此關係を更に精細にしやうといふ考へで、寫眞器械を應用してみた、寫眞器械と吾々の眼とは、活體と死物との區別こそあれ、其構造の點に於ては殆んど同じであるから、丁度可い試驗器である、其試驗の結果によると、糊を以て書いた鏡玉に據る撮影は甚だ不明瞭であつて之れに反して墨で書いた所の鏡玉に據る撮影は、殆んど何等の障も無い物像を得る事が出來たのである(挿圖參照)實は私は此の試驗のまだ完結しない前に、此の術の應用を學界で報告した處が、非常に反對の聲が高かつた、併し最早斯ういふ證據が擧げられたからには、曩の反對論者は一言も無からうと思ふ。

私は今から十八年以前に、角膜の中心、瞳孔の上に斑點を有する一患者に此の方法を施して、實に驚く可き好結果を得てから今日まで忠實に此の手術を行つて居る、成績は凡て良好で、之れを手術前に較べまするとと、視力が二、三、四、六乃至十倍程も恢復して居る、要するに之れは半透明のものが不透明となると却つて光線の散亂を防ぐからである、手術の結果は、啻に外觀の體裁を宜しくする許りで無く、永久不變に視力を恢復せしむるものである。

私は右の樣なことを書いて遙に獨逸の雜誌に寄書したが、嘗て私の先生であつたホッシュース教授は早速手紙を呉れて、寫眞器械を以て比較證明したのは極めて良い思付であつた、とて其の著述に係る眼科學の第四版には、此の所謂點墨術の視學的價値を公認して改訂を加へ又其他に續々出版せらる諸家の新教科書も皆之れに倣ふやうになつたのは心地善き次第である。(大正四年二月九日大阪朝日新聞)

學位請求論文に就て

人各々特性ありこの特性は一方に於て長所たると同時に又他方に於ては短所たり、人は我特性の長所は之をして愈發達せしめ、又短所は則ち他人に鑑みて之を改むべし、されど又一にも二にも人を學びて己を忘るゝ者は終ひに事を爲し得ざるを多しとす、他の長所を學びて同化し自重心を保持し其特性を發揮してこそ始めて眞個の人たるを得べし。一國に於ける關係亦之に同じ英吉利人は、頗る自重心の強き國民なりと聞く。之れ一方に於ては彼の國人の缺點たると同時に又彼の國が今日あるを致せし原因ならずとせず。我國は維新の當初長夜の眠りより醒めたる時泰西諸國の文明狀態を見大に狼狽し彼れに遲れざらんとし急に其文明を輸入し僅々五十年の間に斯く顯著なる發達をなせしも飜て其半面を見れば之に伴ふ弊害も亦僅少ならざるを感ず。是れ只管西洋に心醉し國性を顧みず自己を沒却し一にも二にも模倣之れ事となしたれば也。過渡時

代に於てはかゝることも或は己を得ざらん。されど吾人は今や自覺せざるべからず模倣は創造の才を愈乏くす、我國が斯く模倣を事とせる間は我國の文明は到底彼の國の右に出づること能はざるべし。今や我邦は列强の伍に入り內容も亦追日充實を加ふるの時吾人は扈從的の考を棄て大に自重して我國粹を發揮せざるべからず。

退て我醫學界に於ける狀態を按ずるに最近我國に於る進步は實に驚嘆に價するものありと雖も尙列强に比して遠く及ばざるものあるを思ふ、醫人にして彼の國に遊びて其蘊奧を探らんとするもの追年多きを加ふるは是實に我邦醫界に大なる貢獻をなすものなり。されど予は此處に不滿の事あり、开は彼等留學するもの其多くは彼の地の材料に依り彼の國人の助力を得て博士論文を完成し學位を請求すること之なり、彼の國の學位を請求するならば彼の國に於いて研究したることを以てするも不可なかるべし、されど我國の學位は我國に於て研究したることを以てするも不可なかるべし、さ

れば我國の學位は我國に於る研究を以て求めて然るべき也。少くとも其主論文は我國に於ける研究事項たるべきなり、舊臘十二月一日發行の雜誌日本及日本人紙上に額田醫學博士は本邦大學の設備の不完全を論じて後「敎授として研究を指導するのが多く無能である」と記載せるのみならず猶「今日迄大學院に在學する者の數は極めて多數なるに拘はらず成績の甚だ擧らざるもの全く此に因するのである。多少とも野心を抱藏するものが皆早々洋行するのも之れが爲であるのだ。事實に於て日本に於て研究に成功して居る者は寥々晨星も啻ならすして、多少とも名を成し〻者は皆な歐羅巴で研究をした者のみである」と特筆せり。然り實に從來我邦に於て研究成効せる者は甚だ少數也、されど今や我邦に於ても研究の不可能なるに非ず我國に於て研究する者の努力尙ほ足らざるなり、歐洲先進國にありては諸般の設備及一般科學も進歩せるを以て研究には便ならん後進たる我國に於てはかゝる點に於て種々の困難を感ずべし、されど研究絕望なりと云ふ程尙我國醫學は貧弱なるべきか、如何なることに於ても事の創始に於ては多少の困難は免れざるべし。誰れしも難きを棄て〻易きに就くは人情なり、されど予は思惟す、本邦が多少の困難を排して自國に於て研究に力めずして成功の易きに從ひ他國に於て研究を遂ぐるの士多き間は我醫學は發達せず從て彼と相距る遠きにあるべしと。固より彼の國の進歩せる所を倣ひ我醫學を發達せしめんとするは可なれども自己の作業を他國に於て材料を求め他國人の補助を得てなすは是我國の價値を疑はしむるものならずや、我國が彼の國に比し進歩の遲れたりとせば我國には夫だけ研究すべき事項は多かるべき理なり、されば予の望ましきは資あるものは大に彼の國に遊びて蘊奥を極めその得たる深遠なる知識を以て我國の豊富なる材料を研究し我國の學位は我國に於て研究したる作業を以て請求すべきこと之なり。よしんば自己獨立の作業にもせよ外國に於て成し遂げたるものなりせば彼等に賴りて事をなしたる

が如く臆測せられ易きものなればなり、且つ彼の國人より日本人は自國に於て研究し能はざるものなりとの感を抱かしめ爲に侮蔑の念を以て迎へらるゝに至る、是れ實に吾人の大耻辱とすべきところにして縱令其文章は邦文なるにもせよ歐文なるにもせよ自國の學位を請求するには自國に於る研究、少く共其主論文は自國に於ける研究を以てすべきにあらずや。今や我醫學は我國に於て研究の不可能なる程幼稚なるものにあらず、我國が諸般の方面に於て創成の才に乏しく單に日本人は模倣的國民なりと輕侮せらるゝは一に我國人の自重心と自信力との足らざるためなるべし。目下の狀態尙泰西諸國に一歩を讓ると雖も其扈從的態度を棄て彼の長所を吸收同化し以て大に奮勵努力せば我國今日の程度を以てするも彼等に對抗するの時期遠きにあらざるべく日本醫學の建設亦容易なるべし。予は大正三年の劈頭に當りて我國人が大に自重し大勇猛心を起して奮鬪せんことを希望し敢て我醫學研究者に對し一言を呈するものなり。

（大正三年一月十七日醫海時報）

非學閥諸君

明治の維新は廢藩置縣士民平等の世となり從來の士農工商の區別は全く廢棄せられて實力競爭の世となつた。嘗ては互に相犯すことの出來なかつた處の區別も今日に於ては何の墻壁も設けられぬ樣になつた。己れの技能により己れの思考のまゝに其本領を發揮することを得るが故に士も商たるを得べく農も工たるを得べく曾ての如く門閥を重んずるの弊を廢せられて、如何なる事業でも企つべく行ひ得べき實力主義の行はるゝ樣になつた事は國家の一大慶事と云はねばならぬ。然れども既に全く消え失せし筈なるこの弊風も其形容を改めて更らに學閥なる名稱の下に現今の社會に跋扈しつゝあるが如き感あるは私かに遺憾とするところである。殊にその尤も自由を尊重し眞摯なる態度を要すべき學術に於てこの弊風の存在せることを聞くは吾人の頗る痛歎とす

る次第である。

我醫學界に就いて是を觀るに其研鑽の結果若くは其結果の取扱等の上に於て東大出身者とその他の出身者〻の間には何となく多少の軒輊がある樣に思はれる。殊更に專門學校出身者とか檢定試驗合格者等の學問の生命及待遇等に關し寡なくとも其業績に對する價値の批評等に就きてこれ等しく司命の任に當るべき醫師たりながらそこに非常の厚薄のあることは爭はれぬ事實である。等しく高等學校に居る生徒の中でも比較的優秀なるものがより多く東大に集ると云ふ理由もあらうけれども東大出身者は何となく超然として居ると云ふ定評のあるのは又爭はれぬ事實の樣に聞き取れる。中學及高等學校の競爭に打勝ちて大學へ入學したる俊才が比較的完全なる設備の下に教育せられたるものであるから、同等の腦力同等の時日に於ては彼等が他の出身者よりも勝つて居ると云ふことは蓋し至當のことであらうと考へられる。實際又世上に學

術上の業績を擧げたるものはこれらの中から多く出て居るのである。

學校に於ける教育は他動的の注入法であるけれども社會に出てからの學問と云ふものは全く自己の努力によりて始めて成否の境が定まるものである。然ればその他の出身者たりとも絶對に優秀者無しと云ふ譯のものでない事は素より明瞭な次第である。兎と龜との競爭ではないが孜々として止まざるの努力は安閑たる放慢生活には打勝つことが出來べき筈である。注意力と向上心なき自安が奮勵と切齒とに因る努力に追ひ越さるゝは當然の理である。富豪門地の子が晏如として遂に不結果を將來し貧弱無名の子弟が却つて好結果を收むるのもこの理由に外ならぬ。かの「ノーベル」賞牌候補者に擬せられて、渾球上の各社會に喧傳せられた野口英世博士は如何なる學閥を有して居るか、傳染病研究所にありて英名を恣にした淺川範彦博士は如何なる學閥を有して居つたか、醫學界の流行兒佐多愛彦博士は如何なる學閥に屬するか。菅井竹吉博

士、牛久保政治博士、又久留春三博士と云ひ更らに有名なる須藤憲三博士、土肥章司博士の如き或は彼の有望なる未來を有すと稱せらるゝ現時留學中の小口忠太君の如き皆是檢定試驗合格者中の俊才にして非學閥派の好模範としては誰も異議を挾むものはなからうと思ふ。尙他に醫學專門出身中の儕々たる多士を擧げ來つたならば指を屈するの遑ないことであらうと思はれる。

學術の研究は獨り大學出身の人にのみ限られると云ふ理窟のないことは以上列擧したる諸君の業績が證據立てゝ居るではないか。檢定試驗も愈本年を以て終結をつげると云ふことであるから諸君は或は數に於て心細き感が起るかも知れないが充分の努力を以て研究に研究を重ね學閥者流を後へに撞着せしむべくどしどし業績の發表を希望するのである。是れ實に學問の自由を尊重し忌むべき學閥を排除し得べきのみならず又一面實に國家の慶事である。更に又眞に學問に忠實なる所以である。平坦なる道を辿つて所期の地點に到らんとすることは平易のことであり且つ却つて迅速に行けるであらう、これに反して峻嶮の坂を攀ぢて橋もない谿谷を渡りて豫定の彼岸に達せんと云ふことは時間の點に於ては輸くるかも知れないけれどもその勇ましき行動は貴むべきものでなければならぬ。封建の頃門閥の最も甚しかりし時代に於てすら新井白石先生の如き人が出たではないか、現時大正の御代にありては已に以前の如く大學出身者も漸く其適當の渇仰幼稚なりし世人より必ず大學者なるかの樣に思はれたる時代ではなくなつた、兎も角腕の世の中となつては門地出身の如何よりは必ず先づ其實質を以て論評すべく要求せられて居る。

されば將來の向上發展は一二眞面目なる研究と健實なる努力の繼續如何に關するものとなつた。此文明の賜物たる好機運は益々平等自由の福音を齎らす事であらう。非學閥者諸君大に自重して決して自ら墮すことなく、自ら遜る事なく研究愈勉め以て

大事の成功を期せんことを希ふのである。詳言すれば今や智識は全國民を通じて平均せられつゝあり我醫學界の如きも其素養の上に殆んど將に均一に近かんとしつゝあるに非ずや。余輩は決して大學出身諸君を批難するものでない、況んや其實質を疑ふが如き事は更に考へないのである。只だ其出身の色彩を異にする儕輩に向つて一種の輕侮と加ふるに自から高ふして而して獨り安じ爲めに却つて其發達を阻害したるに心付かず徒らに只一概に他を排せんとするが如き傾向ある所謂學閥なる弊習の打破を希望するものであつて、その是れを實現せしむる捷徑は所謂非學閥の諸君が自ら墮さず尊重すべき學問の自由に伴つて益々發展せらるゝのが何よりで是れ頓がて學問の進歩を促し延いて國家の大慶事となる譯け合であると思ふのである、男子一たび手に唾すれば關八州容易に其有たるべしである、余輩は切に從來多少存したりし屈伏的、自卑的態度より醒めて大いに奮勵せられんことを希望したいと思ふのである。諸君以て如何となす。（大正三年一月二十一日日本之醫界）

商船模型を市内各小學校に寄贈するに就て

己れの惣てを犧牲にして獻身的に、弟の發育を樂み、姉としてのみでなく母役をも勤めて呉れた、私の唯一人の姉は知らぬ間に年を取つて世の所謂還暦に達しました。私は如何に之を祝賀し且つ記念すべきかと千々に思を凝して居る中に、圖らずも世は諒闇の雲に被はれて、歡喜の情は悲哀の極と變りました爲に一時差控へて居ましたが此際私事を公事に轉じて夫れが且幾分なりとも公益の爲めとなる事であつたならば、其目的を達する上に於て大なる障りもあるまいかと私の常識で判斷致したので、此商船模型を名古屋市内尋常高等各小學校に寄贈すべく考へたのです。

抑も社會には必要な事が澤山あるけれども差當り思ひ浮んだのは、時節柄此島帝國に缺乏して居る海事思想を養成したいと云ふ思付から、先づ市内の小學校に商船模

型の備付が有るか無いかを調査致した處が、五十四校中僅かに九校を除くの外其設備のない事が分りました。續いて私は一面出版界を物色して見ましたが、硬いものにも軟いものにも恁んな種類の著述の極めて貧弱である事を確め得たので更に驚いた次第です。元來我々日本人は地理上の關係からしても、大いに海事思想に富んで居るべき筈ですが、事實は之に反して居ます、而かも其海事思想鼓吹の方法に至りましても決して行屈いては居りません、之は確かに我國の大缺陷で久しく鎖國の習慣に囚はれて居た爲で有りませうが何人も遺憾とする處であります。故に私は之が鼓吹奬勵の一端にもなればと思うて、此案を知友は勿論の事松井知事さんや阪本市長さんにも其の意見を聞いて見た所が、私の此企てに對して何れも贊成の意を表せられ殊に船舶は女性であるから婦人の還暦祝には至極適當の事であらうと言はれて決意したのです。

海なる哉、海は世界の領土です、四面環海の我が日本は東西相對して最も能く英國に似て居ます。世界の制海權は嘗て和蘭が握つて居ました、其後英吉利に歸しましたが獨逸が世界を敵として戰ひを始めましたのも歸する處は英國と此制海權を爭はんが爲めです、バルカン半島の不斷の爭鬪も此海を得んが爲めで露國が嘗て我國と戈を交へ今又獨逸と戰ひつゝあるのも海の爲めです、而かも四面環海の我國はそも何等の幸福でありませうか、我國が今日世界列强の間に伍して國威を輝かしつゝあるのも一つは此海の爲です。「海」といふ考は我々日本國民が造次にも顚沛にも忘れてはならぬ事であることは今更私が申すまでも無いが、極めて小さな企ながら私が最愛の姉の還暦記念の爲めに「船」を擇んだのは恁うした考に依つたもので、其模型に諏訪丸を選定したるは本邦の造船所で最近に竣工したものであるのと、且は目下日本の商船として噸數が最も多いからです。猶溝部少佐の「海へ」稻葉中佐の「商船と日本」の兩冊及び石田

教諭作歌某氏作曲の唱歌「商船」一編を添加致したのは海と船とに就いて聊か各位の参考資料に供し度いといふ考で、各位が兒童に向つて上記の思想を更に鼓吹奬勵あらんことを冀ふ次第です。（大正三年十二月）

鑑定料に就いて

自分は過般或る事件に關して當地方裁判所から醫學上の鑑定を命ぜられた、曾て或る鑑定をして迷惑をした事もあつたから止むを得ぬと云つては甚だ濟まんが、進まぬ乍ら鑑定に當つたのであつた。其後どんな成行になつたのかと餘計な事を心配して居たが程經てから被告は無罪と決定し、今迄着せられた忌はしい徴兵忌避なる汚名を拭ひ去られた趣を新聞で見て、喜ばしいことに思つた。然るに裁判所からは有罪になつたとも無罪になつたとも云つて來ない。それはさういふものであるのであらうが、鑑定料の事に就いても亦何の沙汰もない。變なことだ、新聞の記事が間違つて居たのか知らんと思つて或る懇意な專門家を訪ふて尋ねて見た所が其の人曰く、「そりやいかん、鑑定料は此方から請求しなきや呉れぬものだ」と云つて、刑法施行法第六十五條を示された。即ち

「證人鑑定人及通事ノ日當旅費及止宿料ハ豫審ニ於テハ其終結前公判ニ於テハ其判決前ニ本人ヨリ請求スルニ非ザレバ之ヲ給與セズ」。

法律の事なんか自分は門外漢だから一向知らぬので「はあ、そんなことがあるのですか」と云つた樣な事であつた。之からの人間は法律も一通り知つて置かねばならぬけれども、此繁雜な世の中に法律をそう一々詳しく覺えて居られるものでない。大抵の事は常識で押し通さなければならぬ。個人道德から云つたならば、向から賴んで來たのだから、こんな場合には御忙しい所を有難う御蔭で斯う云ふ事になりましたと云つて、御禮を云つて來る可きである。此方から請求しなければ鑑定料を出さぬなんと

云ふならば、夫は沒常識と云ふか人間の道を心得て居らぬと云はなければならぬ。自分は單純にこんな事を考へて居たから、何の手續もしなかつたのである。廣い世の中には隨分かゝる經驗を嘗めた者は他に。決して少くない事と思ふ。現に自分の知人にもかゝる事のあつた事を耳にした常にかゝる鑑定をしつけて居る人は慣れて居るからこんな失策はしないだらうが、我々の樣に法律に暗い不慣なものには無理ならぬ事と思ふ。固より個人道德と法律とは異るし、同じ事の樣に思つて居るのが過であらうが、然しこんな法律を設ける必要があるであらうか。與へる可き報酬を本人よりの請求なくして之を與へたならば、煩雜な手數でもかゝるのであらうか。又法律の尊嚴を傷けるであらうか、吾人は決してその理由を認める事が出來ぬのみならず、却つてかゝる法律を設けて强ゆることが迂遠にして、法の尊嚴を失せしめるものであるやうに思はれる。鑑定人と雖、相當の業務あるものである。其業務の時間を割き、而も重大

なる責任を以て此鑑定をなすのであるのに本人より或時期迄に請求しなければ給與しないといふのは、法の示す所餘りに人を遇するの道宜しきを得ないといふ可きではなからうか、當然受け得らる可き報酬を請求して受けるのとかゝる事をせずして向ふから與へらるるのとは受けるものゝ氣分に於て大なる差異を感ずるものである。然れども法は國家の定めたる掟であるから、國民たるものは之を遵守しなければならぬ。法律として制定せられてある以上は勝手な事を云つて法に從はぬ譯にはいかぬ。されど一方又法律なるものは之國家を治むる上に於て必要上作つたものであるから、若し不必要なもの又は不適當なものと認めたならば、之を廢し又は變更するのは適宜の處置ではあるまいか。將來社會の進步發達と共に、醫學上の鑑定を要する事の益々增加する事は我邦に於ける事歷に徵しても、歐洲諸國の有樣を見ても明かである。此際かかる條項の存在するのは如何いふ立法の精神から割出したものであるかは知らぬけれど

も人民の大なる勞苦及責任を顧慮せぬ樣に作られたる法令は改正したらばと考へるのである。讀者以て如何となす。（大正四年一月十一日日本之醫界）

一年志願兵制度の不備

現在の一年志願兵制度には、頗る不備な點が多い、隨て何んとか之が改正の法を講せねばなるまいとは予の既に久しく耳にする所である。夫れ故予は今回本務の餘暇を以て、本制度に就て種々調査をして見た結果、果して世評の眞實なるを確め得たると共に、現行制度の極めて不完全なものなるに驚かされたのである。併し予は元來醫師であつて、凡ての方面の事情に精通して居る譯ではないから、茲には單に予の比較的確信を得ることが出來たと思ふ一年志願兵中の所謂衛生部志願兵、特に軍醫生に就て愚見を陳述し、其他に就ては敢て容喙を差控へようとするのである。

一年志願兵は人も知る如く、中等程度以上の教育を受けた者に對して、特に一年の現役と六箇月間の勤務演習との終了後、規定の試驗を執行して、其の合格者を豫備役將校に任ずるものであつて、是れ一に畏くも聖上陛下の教育尊重の大御心に出でしものと言はざるを得ないのである。然るに其の實際は如何と見るに、多年學に身を委ね、孜々矻々、研學の功を積んで、遂に最高學府と稱せらるゝ大學の門を出た醫學士のやうな人で、今兵役に服して一年志願兵として勤務する所を見るに、先づ十二月一日入營して以來、第一期第二期の六箇月間は他の初年兵と同じやうに訓練せられ、翌年の六月に至つて初めて軍醫生として衛生部に入り、茲に所定の教課を受くることゝなるのである。斯う一言に盡くして了へば何んでもない事であるが、此の軍醫生となる迄の六箇月間に於ける內容に就て、是等軍醫生と爲つた者の實際の經驗談を色々と聞いて見るに、之は又た實に驚くべきものがある。即ち此の六箇月間は他の一年志願兵と共

に、右向け左向けから銃の操法抔をやられるのはまだしも、往々否な殆ど凡てが志願兵係りの下士連中から、星や筋が殖えぬ中に出來るだけ脂を絞つて置けと言はぬ許りの取扱を受けて、絶えず侮辱されるのが例になつて居る。實に意外千萬ではないか。夫れならば六箇月後軍醫生となつて衞生部に這入つてからは什うであるか。彼等軍醫生が日常の敎課は看護敎程とか、衞生學とかさては調劑敎程とか、數へ來れば實に其の煩雜に堪へぬ程あるが、孰れも皆初步中の初步に屬するもの許りである。例へば人體の骨格とか構造のやうな、實に幼稚極つた、殆ど醫學の素養の全然缺如したものに敎ふるやうな事のみを、さも業業しく勿體な氣に敎ふるのである。普通の人即ち其の道に何等の素養なき人々に敎ふるのならば、或は之も必要であらうが、苟くも斯道に一通り蘊蓄のある大學卒業生たる醫學士に、斯の如き幼稚極まる事を敎へ込まうとするのは、丁度數十里を踏破し得る屈强の男子を赤子扱にして、事々しく步行を敎ふる

に異らぬのである。實に是より愚にして又た其の人を輕蔑したものはないではないか。更に奇怪千萬なるは、或る聯隊に於ては何處迄も此の敎程を强制するかと思へば、又た他の聯隊では單に形式に止まつて、殆ど沒却されて居る。併し何れの隊でも要するに無知識然として何事も初學であるかの樣にして居るのを喜ばれ、少しでも新知識を顯はすのを以て上官の感情を害する點に至つては、殆ど皆同一軌である。嗚呼多年研鑽の功を積み、斯學最高學府たる大學の卒業生に對して、斯くも平凡至極なる敎程に屈服せしめ、日常殆ど用を爲さゞる作業にのみ服せしめ、以て能事終れりとなさんとす。予は彼等有爲の軍醫生に對して、實に同情の念を禁じ得ないのみか、亦た以て國家の利害得失に對し、喟然として慨歎せざるを得ないのである。斯くて平凡なる軍醫生は、更に六箇月間の平凡なる勤務演習を要し、此の間前後實に一年有半の長時日を徒費せざるを得ないが爲めに、嘗て天晴れ優秀の才能を以て許された者も、此の一年

有半に亙る平凡なる感化の爲め、何時か學力手腕共に退歩して、遂に復た用ゐるなきに至つた例は、實に尠くないのである。單に其の人の爲め悲しむべきのみならず、又國家の爲め寒心すべき事柄であるのは、敢て論を俟たない。而して此の如きは、皆一に現行制度の罪である。

現行制度は力めて平凡化しようとする。隨て何等新研究の餘地を與へないのみか、一擧手一投足、殆ど凡てを束縛して、折角其の人の有する優秀なる技能をして、全然人知れず暗所に埋没せしむるの餘儀なき有樣に陷らしめて居る。此の如きは實に國家の大損失も亦た甚しいと謂はねばならぬ。予は此の國家の大損失を防止する點に於て先づ現行制度の改正を絶叫せざるを得ないのである。現行制度を改正して人物經濟より生ずる大なる利益を國家が享受せんことを希望せざるを得ないのである。

茲に於て乎、先づ現役軍醫との比較對照を要するのである。現行制度に在りて、大學

卒業者にして現役の軍醫たらんとせんか、入營後六箇月間見習醫官たる後、直ちに二等軍醫即ち中尉相當官として採用せられ、其の待遇たるや先づ以て極めて丁寧なりと評さねばならぬのである。然るに一方一年志願兵に至つては、同じく大學の教程を踏み、同じく最新の學識を有するにも拘らず、最初の六箇月間は一兵卒に等しき待遇を受け六箇月後の軍醫生としても、亦た何等研究上の餘地を與へられざるのみか、一箇年後更に六箇月間豫備の勤務演習を終了し、規定の試驗を經、漸く一年有半後に於て初めて三等軍醫たり得るのである。同一大學卒業生にして兩者の境遇の雲泥も啻ならざる、不公平も亦極まれりと謂はねばならぬ。抑々予が茲に主張せんとする論點は、一に其の不公平なる制度を改正して、人物經濟の途を開き、以て我陸軍衛生部をして、內容上經費上極めて有利なる制度たらしめんとするにあるのである。

一體大學出身の醫學士を殊更一年志願兵として、一年有半も訓育しなければ、軍醫

として役に立たぬと云ふ理は殆ど成り立たないのである。論より證據前記の現役の醫官と爲る場合には同じ醫學士を六箇月後には一足飛びに二等軍醫に採用してゐるではないか。更に實戰の經驗に徵しても、日露役時代に於ける彼の徵發軍醫が、何等軍事教育を受けて居らなかつたにも拘らず、殆ど實際上差支がなかつたのみか、其の功勞の沒す可らざるものがあつたのは、普く世人の記憶する所である。實例は既に此の如く立派に證明して居るのである。斯く考へて見れば、陸軍衞生部に於ける現行一年志願兵制度の如きは、極めて愚なる政策と言はねばならぬ。國家に取りて不經濟至極なるは極めて明瞭である。今や我國の現狀は貴重なる黃金を銅否鉛として使用する程餘裕嘖々たるものではない。須らく黃金は出來得る限り最初より黃金として利用せねばならぬ。然らば今一年志願兵條例を改正して、黃金を黃金として利用するの方策如何。左に之に對する予の意見を述べよう。

先づ予は醫師の一年志願兵を豫備役見習醫官と改稱するのが適當と思ふ。而して此の豫備見習醫官を志願する者は、入營と同時に豫備見習醫官を命じ、現役の見習醫官同樣六箇月間教育することにする。さて六箇月後規定の試驗に合格したるものゝ內、帝大醫科卒業者は二等軍醫に又其他は三等軍醫に任じ、恰も現役醫官と同樣に進級せしめるのである。又た此の試驗に於ける不合格者は、衞生部の下士に任じて引續き勤務せしめ、六箇月後再び試驗を執行して其の成績に依り、三等軍醫に任ずるのであるが、此の場合は帝大出も其の他も皆均しく三等軍醫たらしめるのである。而かして志願兵中衞生部士官に任ぜられた者は、其の任官せられたる日より一年間、又た下士に任ぜられたる者の內、更に士官に任ぜられた者は、其の任官の日より一年間、ともに全部無給を以て平時勤務に服するものと規定するのである。如上の結果、現役の二三等軍醫は現在より著しく其の定員を減じ、以て唯さへ不足勝なる經費をして十分

節約せしむることが出來るのみか、實際上何等差支のないのも亦予の確信して疑はざる所である。現役軍醫の大部分は、世人も知る如く大學乃至專門學校の學生時代より既に陸軍衞生部委託生として夫夫相當の學資を支給してある者許りと言ふを憚らない。隨て是等現役軍醫を得る爲めの經費は、却々以て單に現役中の俸給位に止まらないのである。而も是等軍醫中規定の義務年限の滿了せざるに先立ち、早くも手段を廻らして豫備役編入に努力し、以て開業醫たらんとする者、決して尠からざるは、實に蔽ひ難き事實にして、夙に識者の慨歎措く能はざる所である。

以上予の所論は、現行一年志願兵條例、就中衞生部軍醫生(藥劑生も同樣)の制度が餘りに不備にして、爲めに絶えず有爲の人物を害し、惹いて直接國家を損すること極めて大なるを見て、遂に默過するに忍びず、玆に卑見を開陳したる次第である。陸軍當局者始め大方諸賢にして、熟讀叱正を賜らば幸甚の至りである。(大正四年一月十五日日本及日本人)

學位に對する待遇

予は昨秋縣下に行はせられたる陸軍特別大演習後の大宴會の席に列するの光榮を得たる一人也。予の名譽之に過ぐるものなく、一身の榮譽一家の榮譽として永く之を傳へんとす。從來學のあるも無位無勳の者はかゝる席に列したるの例を聞かず。而も此光榮に浴するを得たる、實に望外の光榮として欣幸に耐へざりしが、大演習は本年も晩秋の候攝河泉の野に擧行せられ、大演習後の大宴會も亦開かれぬ。是に於て予は大阪にある予と境遇を同じくする者に、參列の榮譽を得たるや否やを照會したるに其答に「無位無勳の我等平民醫は恩典に浴するを得ざりき」と。予乃ち以爲らく、昨年予の賜餐の榮を受け得たるは一異例なりしかと。予は年來我國に於て學者を遇するの道

に缺けたることを遺憾としつゝありし者なるが、偶々當地一日刊新聞紙上に學者優遇論なる一論文掲げられたるを誦み予年來の持論と符合したるを知りし時、天下又同感の士あるを思ひ、甚だ會心の文字として之を珍重したり。

一國の文明が學理の研究に俟つ所頗る多きは、既に世人の熟知する所也。啻に一國のみならず又以て世界の文明を擴大し、世界人類の向上發展を促進するものも亦、實に此學理の研究與て力多きは、敢て玆に説明を要せざるべし。百年前北歐の一半開國を以て、世界史上に蔑視せられし彼の獨逸が、近年國運隆々四隣を睥睨して、一躍列强中の霸者を以て稱せらるゝのみか、其の前途の發達に對して、多大の恐怖を英佛兩國に懷抱せしめつゝある所以のものは、一に渠れが巧妙なる富國强兵の調和にありと雖も、其興國の主因は、正に殖産興業の隆盛に在りと謂ふべく、殖産興業の隆盛が一に卓越せる學理の應用に基因せるは、既に識者の定評とする所なり。今や我國は、國を擧げて均しく貧國强兵の不自然に苦悶す、豈之が救濟策に焦心苦慮せざるものあらんや。而も之が救濟の途、一に殖産興業の發達を圖りて、先づ富國の實を擧げ、以て貧國强兵てふ大不自然より離脱するに在るは、久數世論の一致する所也。而して今世紀に於ける殖産興業の發達が、新

進の學理應用に期待せざる可らざるは、近く獨逸を始め世界の列强の實例に徵して、既に世人の疑惑を爽まざる所玆に於て乎、學者に對する國家的優待の必要初めて起る。蓋し學者の報酬は、其研究の勞力に比すれば普通頗る僅少なるを免れず。一方篤學なる研究者は、勿論物質的報酬の多寡のみ重視するものにあらずと雖も、而も猶世間の待遇法如何が、縱しや幾分なりとも、其精神上の鼓舞奬勵に與つて力あるは古來人情自然の約束のみ。吾人は此故を以て國家爲政者が機會ある毎に是等學理の研究者を表彰して、絶えず之が鼓舞奬勵策に遺憾ながらんことを切望せざるを得ず。

玆に學位令なるものあり、優秀の學理研究者に博士の學位を授與して、以て其功績を世人に報告し、其名譽を永遠に表彰しつゝあるは、夙に世人の熟知する所にして、更に近年制定されし彼の恩賜賞乃至學士院賞と共に學者優遇策として、國家が採れる手段中最も著明のものと見做すべし。而も猶吾人の頗る怪訝に堪へざるは、國家の學者優待法なるものが、之を彼の戰場に馳驅せし武官の優待法に比して、其物質的報酬乃至名譽表彰に對する手段方法の貧弱なる、眞に驚嘆を禁じ得ざる一事直ちに以て、彼の貧國强兵の眞相を説破して毫も餘蘊なきものにばあらざるなき乎。今や我國は、國を擧げて貧國强兵の苦境に沈淪し、敢て爲政者の警

醒を促さゞるを得ざる也。

今次當地に於ける大演習は、言ふ迄もなく大正劈頭の一大壯觀たり。隨て之が陪觀の榮を得ると得ざるとは一は一身一家の名譽に至大の關係を有す。特に演習後の大宴會に一平民の身を以て賜餐の榮を得る如きに至ては、其幸榮眞に子々孫々に傳ふるに足る。而も是等幸榮者の顏觸れ中濟生會千圓の寄附者あつて、遂に學位受領者即ち博士の名目なきは、安んぞ學者優遇の聖旨に副へるものと斷言するを得べき。濟生會一千圓の寄附者と、多年苦心の研究の結果として、本邦學界の爲めに偉勳を奏したるものと對比して、國家其物より之が輕重如何を論究せんとす。其輕重、豈一言半語の說明を要せずして明白ならずや。從來如此問題に注目すべき論爭を生ぜざりしは、學者の多くが比較的名利に淡白なると、又一は渠等の多くが、官吏として相當の位官を有する爲め、其學者として何等待遇を受けざるにせよ、猶且其位官に對して相當の待遇を受け來りしに由る。然るに茲に何等官途に身を置かざる一布衣の博士ありとせば如何華竟問題は一に此點に存すと見るべし。吾人は國家が絕えず學者の皷舞奬勵策を講究し機會ある毎に渠等の名譽を表彰し、以て學理の研究應用を隆盛にし、以て興國策の一助たらしめんことを希望して已まざる也。（大正二年十一月十一日新愛知新聞）

所論如此。而て不圖も予の大宴會の陪末の榮を許可せられたりしは、當局聊か此處に鑑る所ありしに因る可きかと思惟したり。然るに本年の大宴會には之なしと。單に尾三と攝泉と其處を異にせるのみにて彼此差あり。予は固より大宴會に就きての事のみを云ふにあらず。只かゝる機會を利用して待遇の途を講ずるを適當なりと信ず。

抑も博士は是一の學位にして稱號に非ず。これに對し國家は如何なる權利を認むるか、試に學位令を繙かしめよ。其第三條には、

學位ヲ有スル者其名譽ヲ汚辱スルノ行爲アル時ハ博士會議ヲ經テ文部大臣其學位ヲ褫奪ス

てふ罰則あるも、離宮拜觀を許可せらる可き資格者中に學位あるものを包まれたるの外、何等學位に對する待遇法なし。是に於て學位なるものと稱號なるものと幾何の差異やある。吾人は名利の爲斯る說をなすものにあらず。然れども聊か局に當る者の意を用ふることに依りて、吾人が精神的に大なる滿足を與へられんことを欲するに止ま

ざるのみ、而も其方法たるや、予は當局者の之を計畫するに吝なるを思はざるを得ざる也。社會の進歩發達が學術進歩は則ち學者の研究の結果たる可きは、毫も疑を挾むの餘地なからむ。學者優遇の必要なるは蓋し明にして、獨り前掲の論文を俟つて初めて知る可きに非ざる也。不幸にして未だ此に對する何等の制度もなく、適當なる方法も亦設定せられず。單に學位は一稱號たるの觀あるに過ぎず。如此を以て學者を遇するの道を得たりと云ふ可きか。學者は固より名利の爲に研究するものに非ず。然れども彼等に精神的の滿足を與ふ可き適當の方法ありとせば、是れ軈て學者を鼓舞して益研究を積ましむるに偉大なる助力たる可きこと言を俟たず。予は學術進歩の爲、國家社會の發達の爲學者の待遇及學位に對する待遇の必要を開陳し、敢て學位令中其待遇に關する制定を希望して止まざるもの也。（大正四年一月十六日醫海時報）

回覽感想錄中より

僕の血氣の時代には知人の海外留學の通知が實以て羨望に堪へなかつた。行つて見ると案外反對だといふ話であるが、恰も彼等が極樂淨土へでも赴くかのやうに。

年の加減か此頃は知友の凶報が馬鹿に懸念に堪えなくなつた。中には相應に所謂功成り名遂げた輩もあるけれども、彼れを逝かす位なら、他に娑婆塞ぎの奴がありはせぬか。

老少不定壽命計りは分らぬと昔から云ふ事であるが、お互に死の宣告を受けて居る事をお忘れになつた方がありはせぬか。どうせ死ぬ位なら「忍草には何をしようぞ」「一定思ひ起すよの……」で、醉生夢死は御免を蒙らうでは御座らぬか、御同役如何思召す南無阿彌陀佛。（大正四年六月十二日關西醫界時報）

濟生會の施療患者を研究材料に供する可否

窮民救濟は社會政策上最も大切なる一緊要事なり。社會の進歩發達と伴に追々斯かる機關の備はり來るは國家の爲め慶賀の至りにして、就中先年創立せられたる濟生會は實に其最なるものなり。畏くも叡聖文武なりし、先帝陛下には常に斯かる事に御心を用ゐさせられ、御内努金を御下賜遊ばされ之を其基礎として、更に汎く天下の有志者に醵金せしめ玆に濟生會の成立を見、貧困の爲め醫治を享くる能はざる者を診療救濟することゝはなれり。是れ實に明治の歴史に特筆大書すべき善事たりしなり。而して其創立以來日尚ほ淺きに拘はらず其恩惠に浴したるもの已に幾何なるを知らず、本會事業の社會に及ぼす功績や又偉大なりと云ふ可し。されど吾人玆に一の考ふる所あり

り乃ち發表して以て江湖の敎を仰がんとす、开は濟生會の規則中次の如きものあり、曰く、

濟生會の施療患者は一般普通の患者と同等に取扱ふべし、之を研究材料に供するを得ず

と、是れ濟生會として必ず無かるべからざる要件ならんや。本會の趣旨が貧窮にして自ら立つ能はざる者と雖も、其人格を尊重し之を取扱はしむることは甚だ結構なる事なれども之は決して患者より望み得べき事にはあらず、又彼等も之を要望するの權利なきなり、而して我等は之に適當の名稱を見出さず止むを得ず研究材料なる語を用ひたれど、我等は決して患者の人格をも無視して恣に取扱はんことを希ふものにあらず、十分患者の人格を重んじ、患者に何等苦痛を感せしめざるの操作に於て、研究の資となり、又斯界の發展の上に貢献となり、或は後進者を敎導する上に好材料たり得るなら

ば、是れ決して不可ならざるべしと信ず。彼等の立場として考ふるも亦恐らく然らん。素より彼等自己の力に依りて治療するを得ざるもの、幸にも社會の惠澤を以て其病痾を除くことを得ば、彼等と雖も又自己の及ぶ所を以て社會國家のため盡す所あらざるべからず、是れ人たるもの丶必然想到する所ならずや。若し夫れ診療を受くる傍ら些細の研究的資料とせらる丶ことあるも、之を以て學術の研究、斯界の發達に偉大の功を遂げ得らるとせば、患者自己に於ても之を以て奉公の誠を盡し得て滿足なるべく、社會としても大なる利益を得、是れ所謂一擧兩得の建策たるにあらずや。又一歩を進めて極論せば、濟生會施療患者として來る者には、即ち學なく德なく常識を缺ける者さへ多し。されば彼等は自己の幸福を喜ばず、間もなく恩に慣れ之が恰も自己の特權なるかの如く振舞ひ、己れの分を辨へず、世の惠みに依りて生活し得ることをも忘れ、往往謙讓の禮を失するのみならず、甚しきは潛越にして吾人の診療に對し、不平を鳴らす

者さへあり、無教育者の爲す事として致方なきも、實に吾人をして啞然たらしむるものあり、斯かる患者に前記の如き規則を設けて其人格を尊重しやるも彼等は決しその過分なる待遇を知るものにあらず。彼等は假令今より以上の待遇を與へたりとも矢張之に慣れて其德を仰ぐ者にあらず。斯かる輩に徒らに恩惠を施すの反つて無益の事たるに非ずや。勿論濟生會患者の悉くが然なりと云ふに非ざれど、斯かる患者には殊に當該規則は不要のものたるなり。されど相當に知識もあり濟生會の主旨を辨ふる者なりとせば、此些々たる自己に依りて國家社會に裨益する所あれば、自ら進みても是を冀はん。重ねて言ふ、吾人は決して人を動物試驗同樣に論ずるものにあらず、充分彼等の人格を尊重し、彼等に不快及苦痛を感せしめざる程度に於て研究の資料に供せんとする也。（大正四年六月十五日關西醫界時報）

著述家諸君に望む

晩近科學の進歩は實に偉大なものである殊に我醫學は其最も顯著なものである。今日より吾々の醫學を志した頃の事を考へて見れば當時の醫學は實に幼稚なものであつた。夫の一國の文明の程度は其國の出版物によりて知られると云はれる通り、一つの專門に於ける發達の程度は、其專門に關する著書によつて推知することが出來る。試に二十年前に於ける醫學著書と今日の著書とを比較したならば、其數に於て其內容に於て如何に進歩したかが明に分る。其當時吾等が醫學を學習した頃には、醫學上の著書は實に寥々たるものであつた。又其內容に至つても頗る貧弱なものであつた。然るに今や我國醫學の進歩と出版事業の進歩は、著書の上に於て非常なる發達を遂げたのである。從來少し詳しく專門の事に就いて研究しやうと思へば、邦語の書は到底取るに足らなかつた。然るに最近に至り專門各科に亙に著書の出ること日を追つて繁く、今や獨逸書に由らずとも邦語の書籍に由つて大抵の事は滿足の出來る樣な程度に近づいて來た。即ち我醫界の模倣的時代は已に過ぎて、毅然たる獨立の域に到達したのである是實に我が學界の爲め慶賀に堪えざる所である。されど予は玆に著述家諸君に一言呈したきことがある。夫は卷頭に於る內容目次を云ふのではない、卷末における索引に就いてである。歐文の著書には如何なる書にも必ずザツハレギスターを附し、詳細に其記載する所の事項を揭げてある。之は讀者に取つて非常に有益なもので、殊に或る一事項に就きて其所說を求めんとするが如き場合には、頗る便利なものであることは讀書子の常に感じつゝあることであると思ふ。我邦に於ても近來の著書には多く之を加ふる樣になつたが、猶之を缺くものが少くない。索引なき書にありては常に自己の手にして居る書物にても、其欲する所を一寸見ようと思ふ時中々出て來ないことがあ

る。況んや自分の未だ通讀しない書物に於いておやで、卷末僅々數頁乃至十數頁の索引は、讀者に取つてどれだけ其便の點に於いて、大なる影響があるも知れぬ。假令本文に載する所偉大なる研究を積み卓越せる見解を連ねてあるとするも、若し索引なきは僅か一局部を見んとするにも、書物全卷或は寡とも其屬するカピッテル全部を讀まなければ、自分の欲する所を捉へる事が出來ぬ場合が多い。かゝる事は時間を惜む研究者に取りては到底煩に堪えざることである。今迄は主として醫書に就てのことのみを云つたのであるが、啻に醫書のみならず凡ゆる學術書にも之が必要であると考へる。他の專門に於ける著書のことは多く知らぬが、恐らく同一にならねばなるまいと思ふ。世の著述家諸君僅か數頁の索引を附するの勞を厭はず、必ず之を附記して學界の爲めに便宜を與へられんことを切望して止まぬのである。著述家諸君にして若し予の願意を容るゝの雅量があつたならば、其御手數序に尙引用書目をも別項に御記載あらんことを希ふ。これは纂譯してをいて著述と稱わる人に向て、封印を付るのが目的でないことは勿論であつて、後世同じ目的の作業をする人に利益を與へることが尠少ならずと信ずるからである。（大正四年七月十五日關西醫界時報）

學會に於ける討論に就て

附豫め抄錄提出の動議

予は常に學會に於ける討論なるものを見聞して、面白からぬ現象の横はれるを嘆くもの丶一人也。假令其會の大なると小なるとを問はず。苟も其學會の字を冠する以上は元より娯樂的集會に非ず、神聖なる攻學機關なるは云ふ迄もなき事實にして、其講演者は即ち學問に忠實なる研學者なり。而して其學者が幾多の歲月を閲して刻苦研究せる、「エネルギー」の凝塊たる業蹟を發表するの場裡なる以上は、其參聽者たるも

の宜敷靜肅一番、演者に對し相當尊敬の意を忘るべからず。而して其所說に向つて細密なる注意と研究心とを以て、其論旨の要領を捕捉し、而して之に向つて相應の考慮と研究とを捧げざるべからず。勿論如何なる事項に就ても各自其所說見解を異にする事多きは當然の理なれば、玆に討論を生み追加をも生ず、研學上の討論大に可なり、追加亦大に結構なり。是所謂學者研究心の噴出する源泉にして、爲めに攻窮を極め得るに至るの合理的及研究的要素なればなり。然りと雖討論なるものを以て、單に「討てよ懲らせよ」主義の如き意を以て徒らに演者の「揚足取り」に汲々たるか、若くば何等かの感情を挿んで之が批難を敢てするが如き現象ありとせんか、吾人は實に之を慨歎せざるを得ざるなり。討の字は夫の辭典に之を徵するも、則ち「尋ねる」「探ぐる」「求める」等の意ある字義にして、其解釋は如何樣にもなし得べきも、要するに討論の討は只他人の鼻の高さを挫くの意にも非ず、又他人の業績を蔑視しあら探しする

の意にも非ず、「相共に手をとり協議し質議する」の意と正解とすべし。勿論演者にして其說や陳舊、其論や杜撰只矛盾撞着何等益する所なきの場合、討議追加に花咲くも宜なれども、此花たるや眞面目にして敬虔忠實の花たるべく、決して剽竊的たるべからず。所謂根を持ち培はれたる準備ありて咲ける我花ならざるべからず。即ち焰の如き討論には各自相當の根據なかるべからず、必ずや演者に劣らざるの研究心あるの士にして、相當に已が實驗を基礎とせるの反駁ならざるべからず。然れども演者を見る往々嫉妬猜疑恰も己が權利にても、侵畧せらるゝもの〻如き態度を爲すの士あり。或は彼が無定見を掩ひ一も二もなく單に發言容喙するが如き態度の人あり、甚しきに至りては學會に於ては假令出放題にせよ、一言半句にても饒舌らずんば斯界に於ける自己の勢力でも消失するが如くに考へ、只管一の虛榮心に驅られ神聖なる演者を苦しめ其說を打挫かんとする憐なる輩あるに至りては、遂に吾人默するに忍びざるものあ

るなり。抑も彼等はかくして他を退け、己が空洞を恰も充實せるものゝ如く衒ひ得て、憍然たるものゝ如き憎むべく又憐むべき輩ならずとせんや。毎々學界に出席して其講演に參ぜられたる諸君は、恐らくは如此場合に遭遇せられたる經驗多かるべく、既往を追懐して此感を深ふするもの寡なからざるべしと考ふ。又夫の世上文藝の方面に於て創作のなき批評家あると均しく、我醫學會に於ても亦討論に起つ人の多くが、却つて自己研究業績の發表寡く、若くば多々之を蓄ふるも憚つて其發表を躊躇せるかの事實は、實に吾人の怪疑に堪へざる處なりとす。

尚ほ予は學會に於ける講演者に向て豫て一定の期日前に單に演題の通知のみならず、其内容の抄錄をも幹部に提出し置かん事を切望するものなり。此必要は既に當路諸君の胸中に湧出せるものあらんも、予の寡聞なる今猶此を耳にせざるによる。蓋し此方案の實行により意外の弊習を防ぎ得べしと信ずればなり。

予は擱筆に際し予の屢企てたる諸種の創案に對し、所謂討論を辱したる諸君に向て衷心感謝の意を表するに躊躇せざるものなる事を特筆せざるべからず。何となれば予は討論の榮を擔ひたると同時に、予は予の所論を益々堅固ならしむべく努力を惜まざりし結果、斯道を益したるものあるを感じて、愉快の念に堪えざるものあるを想起すること毎々なればなり。感ありて敢て此文を草す、識者以て如何となす。（大正四年八月十五日關西醫界時報）

野口博士と恩賞

歐洲戰爭を談ずる者が、必ず異口同音に驚歎を禁じ得ないのは、彼の獨逸の强いと云ふことである。腹背共に强大なる敵を受け乍ら、遂に一歩も是等强敵を、自國内に踏み込ませないのみか、却て自らは海に陸に、將た又た上空に、盛んに進擊を試みて

絶えず聯合軍側を脅やかし惱ましつゝ、一國克く數箇國を制し、戰局の終末をして、殆んど豫測するに苦ましむるに至つては、縱しや開戰の發端や、當時の外交に對する非難の聲の、頗る囂々たるもの之れ有るにもせよ、兎にかく獨逸帝國なるものが、眞の强國たる一事に至つては、何人と雖も、之を否認することの出來ぬのは、最早明々白々、敢て玆に余輩の贅言を要せぬ次第である。

然り獨逸は眞の强國である。多年世界に其の覇を稱した、彼の老大國英吉利をさへ今や既に業に凌駕せんとしつゝある、世界の强國である。然るに此の如き世界の最强國たる獨逸も、僅々百餘年以前に於ては、單に北歐の一農業國として、世人に記憶せられしに止まり、何人も百年後に於ける今日を想像するものが、絶ゑてなかつたと云ふに至つては、愈々驚歎せざるを得ないのである。我國が僅々五十年間を以て、一躍世界列强の伍班に入り、忽ち東亞の强國を以て目せらるゝに至りし一事は、大に獨逸

が興隆の跡と相酷似するものあるが如きも、彼を以て此に比すれば、未だ其の及ばざること頗る多且つ大なるものあるを遺憾とせざるを得ない。甚だ極端の言ひ分ではあるが、我國の眞に世界に誇稱し得るものと言つては、萬世一系の皇室と軍備位のものであつて、忠良無比の貌貅こそ、或は獨逸に優る一特點であれ、之を他にして殖產興業上に、將た又た學術上に、眞に世界的に其偉大を誇稱し得るもの有りや無しや、余輩寡聞、不幸にして遂に皇室軍隊以外に誇稱し得べき何物をも發見し得ざるのである。併し其の我國唯一の誇りたる軍備すら、今や我國の財政難は、所要の軍備費を滿足に支出し得ざる結果、年々歲々、軍備費不足の爲め、豫定の軍備擴張を不可能に陷らしめ、嘗ては日清日露の兩戰役に於て常勝軍の名を博した我が勇武なる軍隊も、歐洲列强と戰つて、果して能く過去兩戰役の如くなるを得べきや、少くも武器の精及び軍費の饒に於て、我れの到底彼に及ばざるの明白なる以上、我國の誇も、最早殆ど言ふに

足らぬかも知れぬ。

是に於てか先づ吾人の是非研究せねばならぬのは、片田舎の獨逸が、如何にして一躍歐洲の花役者となり、一大强國となつたかと云ふことである。而して這般の原因に至つては、國土と民族とを背景として、幾多の歳月の下に作られた遠因近因は、極めて多種多樣であらうが、余輩は今ま是等の原因を一々指摘する煩雜を避け、唯だ一つ茲に有力なる原因として擧げたきは、獨逸歷代爲政家の注意深き政策の成功である。

抑々爲政家の能否、又は其の手腕の巧拙が、直接間接國利民福に影響して、或は爲めに國家の興隆となり、或は之に反して國家の衰亡を招くに至るは、古今東西同一轍であつて、獨逸が今日の如き國運の隆盛を贏ち得たのも、爲政家の成功が與つて最も力多きは、敢て說明する迄もないことである。實に彼等が施政の方針又は政策は、一

言以て之を掩へば、極めて如才なき遣方の中に、周密なる思慮を寓し、實業と云はず學術と云はず、文學技藝と云はず、有りとあらゆる方面に向つて、八方美人主義、即ち萬遍なき保護奬勵策を講じて、絕えず之が發達發明を鼓舞し助長し、其の爲めには思ひ切つて重賞を授くることを辭せず、有らゆる人士に有らゆる全能を發揮せしめ、直ちに之を國利民福に利用し、以て富國を擧げ、强兵の基礎を築き、一日一時たりとも未だ嘗て休止したことはないのである。思ふて茲に至れば、彼れが過去數十年間に於ける驚嘆すべく恐怖すべき長足の進步も、決して偶然に非ざることを知るに足るであらう。

顧みて我國は如何、爲政家の各階級に對する、奬勵果して能く普遍的なるを得たるか、授賞果して能く偏重偏輕なきを得たるか、余輩不幸にして我國爲政家なるものゝ遺方の、極めて片手落なるを不平とせざるを得ないのである。見よ有繫に軍國主義を

以て知られし國だけに、軍人に對する恩賞は必ずしも薄きに非ざるを。然れども殖產興業の功勞者に對しては果して如何、學術上の功勞者に對しては果して如何。その厚薄深淺は問はずして自ら明白なのである。均しく其の御國の爲めといふよりすれば、軍刀を揮つて敵陣めがけて切り込むのも、世人の恐怖せる傳染病患者に接して、其の病原菌の發見に努力するのも、その御國の爲めなるに於て毫も甲乙なきに、之が授賞に至つては、往々雲泥も啻ならざる大差あるを見るに至つては、爲政家の片手落も豈に驚くべく慨すべきではないか。

凡そ人は唯だ己れの本分を盡して、多少なりとも國を益し世を利すれば足るとはいへ、人間は一に感情の動物たるを免れざる以上、授賞といふことは、單に俗社會の奬勵法たるのみならず、常に冷靜なる出世間的たるべき學者に對しても、最も有效なる奬勵法である。然るに我が爲政家の爲す所、常に片手落の授賞を以てし、軍人又は一

般官吏には過分の恩賞あるも、學者などは全く之を度外視し、而して口を開けば輙ち我が學術界の歐米先進國に及ばざること遠きを云爲するは矛盾撞著も、玆に至つて寧ろ愛嬌と謂ふべきである。我國の殖產興業界乃至は學術界の振はないものも、豈に怪むを須ゐないではないか。余輩の切に當局者の反省を求めたいのは、實に此の矛盾撞着其物に他ならぬのである。

借問す最近物故せる獨逸の碩學エールリッヒ氏と共に、サルバルサンの發見を以て世界の醫學界に貢獻せし秦博士に對する當局の恩賞如何、將た又た赤痢菌の發見を以て世界に其の名聲を馳せし志賀博士に對する恩賞如何、言ふ迄もなく共に叙勳の光榮を擔ふたのであるが、併し驚く勿れ、それは單に勳五等乃至六等に過ぎなかつたのである。假りに是等の勳等を軍人中に求めよ、其の如何に學者の恩賞の薄きかは、一目瞭然、寧ろ憫むべき有樣と言はねばならぬ。此他彼の無線電信の完成者にしても、無

線電話の改造者にしても、其の勳功の偉大なる、之を戰場馳驅の武勳に比し、決して遜色あるべき筈はない。然るに何時も屹度遜色あるのは、其の恩賞で、殆んど爲つて居ないと謂つても宜しい。斯くては學術界の振はないのも、洵に無理からぬ現象と言ふ可きである。

更に最近の事實として、茲に是非とも特筆せねばならぬのは彼の野口英世博士である。博士は世人も知れる如く、今度十五年振りに錦を衣て歸朝されたのであつて、我國が產出した近年の一大天才として、單に世界醫學界の一異彩たるのみならず、實に我國光の大なる輝きであることは、既に隱れもなき事實である。博士は曩に歐洲各國から其の名譽を表彰すべき勳章を貰つてゐるのみならず、我國に於ても醫理學兩博士の學位を受領せる外、尙ほ最近に帝國學士院から恩賜賞として金一千圓を受けたのである。斯く云へば、彼は其の恩賞に於て、先づ不足はないと謂つても差閊ない。併し

彼れの年來成せし業蹟に比すれば、極めて輕きに失すと云ふべく、此の如き國光の發揚者に對しては、今ま少し何んとか手厚き授賞の方法も之ありて然るべきこと〻考へられる。然るに時なる哉今や彼れも恰も錦衣故山に歸り、我同胞は久方振りで彼を見ることを得たのである。此の機會に於て彼を親しく表彰し、以て國威發揚者の名譽を宣傳して、一は彼れ自らを激勵し、益々其の研究に向つて邁進せしめ、他は之に依つて我學術界を刺戟し、其の進步發達を促進することは、極めて至當であり、且つ策を得たものではあるまいか。當局者の明敏なる、或は吾人の言を俟たずして、之が實現を見るやも測り難きも、若し其の授賞にして、彼れの名譽を表彰すべく、餘りにお粗末ならんか、野口博士一人の榮辱は兎もかく、却て學術界の權威を毀損し、其結果は寧ろ爲さゞるの勝れるに如かざるに至るであらう。返す〻も當局者の愼重なる考慮を煩はさゞるを得ないのである。

要するに吾人の主張は、國家の富强は國家の均一的發達に在りと信ずるが故に、世の爲政家たる者は、社會の有ゆる方面に、普遍奬勵策を施すと共に、その授賞は特に公平を旨とし、斷じて偏重偏輕あらしむべからざるべく、殊に遲れ勝ちなる我學術界の如き、是非とも此の普遍的奬勵策と公平なる授賞とにより、出來得る限り之が發達進歩を助長し促進するの手段を執らんことを希望せざるを得ない。されば余輩は此の見地よりして、今回歸朝せる野口英世博士に對しては、此の絶好の機會を利用して、大に優待の方法を講じ、遇するに國威發揚の叙勳者を以てし、先づ差當り破格の叙勳を行ひ、次で　聖上陛下より拜謁を賜るの光榮に浴せしめたいのである。世人よ斯る形式の奬勵法なればとして決して學者を待つ所以の道に非ずと爲す勿れ。皇室は榮譽の源泉である、此の機會に於て若し野口博士が、特別の叙勳に預り、又は拜謁を仰付らるゝが如きことあらば、如何に博士の名譽を高め、如何に博士をして聖恩の優渥に感

激せしむるであらう。而して此の一事こそ取りも直さず、軈がて幾多の小野口を發憤興起せしむる所以であるとすれば、是れ獨り余輩が野口博士一人の爲めに言を爲すに非ずして、實に社會の爲め、國家の爲めに之を言ふものなることを知るに足らん。獨逸今日の興隆が、決して偶然に非ずとせば、爲政家たる者深く此に留意せんことを要す。是れ余輩の敢て當局の猛省を促す所以である。（大正四年十月一日日本及日本人）

昭代の二大缺典

明治維新より大正維新の今日に至る約半世紀間に、我が日本の發展膨脹は、駸々として長足の進歩を爲し、殆ど世界に存在をすら認められなかつた絶東の島國が、今や大陸に足を伸ばし、南洋に臂を張り、東亞の盟主とし將た又た世界の第一等國として世界の問題に容喙し得るこゝと爲れるのみならず、歐洲戰亂の勃發するや、其の嚮背

は實に同盟聯合兩軍の勝敗を左右すべき重大地位を占め、而して最近には世界の大金持なる佛蘭西から借金の相談まで受くるといふ豪らい勢と爲つたのは、五十年前の昔と五十年後の今日とを對比して、殆ど隔世の感がある。

併し日本も斯く有形的には、世界の耳目を驚動すべき程の進歩を遂げたに相違ないが、無形的には表面の進歩ほど進歩をして居ないのみならず、或は却て退歩して居るものも少くない。殊に一時に新文明を求むるに急なるが爲に、舊物を破壞し、我が固有の國民的精神及び風俗習慣等にして、滅却し去られ、又は政治的に社會的に、新舊の整理調和を缺くものが多く、鳥渡見渡した所では、日本の進歩も大したものであるが、仔細に觀察すれば、國家一半面の缺陷も、決して少くないので、其の穴だらけの有樣は、恰も蜂の巣の樣だと謂ふも妨げない。今ま一々之を列擧してアラを探したら際限もないであらうが、吾人は唯だ茲に國家稀有の御大禮に際し、昭代の二大缺典と

して、第一に國家の賞罰が著しく公平を失して居ること、第二に國民禮服の制が痛く亂雜不備であることを述べて、聊か當局の注意を促したいと思ふ。

凡そ一國賞罰の權は、國家の重典である、賞罰は公平にして其の當を得れば、一國依りて以て進み、賞罰偏頗にして其の當を得ざれば、一國之が爲めに衰ふ。故に古來英君明主必ず賞罰を忽にせず、愛憎又は親疎により、決して彼に厚うして此に薄く、彼に寛にして之に嚴なるが如きことなく、一顰一笑をさへ愛しむといふ程であるから賞罰は公平の上にも公平を期せねばならぬ。然るに我邦にては、維新以來、百事長足の進歩を爲して居るが、何うも此の賞罰の一點が公平に行つて居ない。朝廷の恩賞は或は吾々の濫りに議すべき事でないかも知れぬが、由來朝廷の恩賞は、常に政權を把持し、又は政權を把持する者に接近し、若しくは緣故を有する者に厚く、否な殆ど是等の階級の人間に限らるゝの有樣であつて、民間にて如何に國家に功勞あり、社會及

び公衆の利益と爲ることを圖つた者でも、全く恩賞に預ることが出來ぬ、假し稀れに恩賞に預る者があつたとしても、それは極めて不權衡なものであつて、之を軍人官吏に比すれば、殆んど言ふに足らないのである。發明や學術の研究などは、決して官吏や軍人等の或る意味に於ける高等勞働と同一視すべきでないのに、民間に於ける是等功勞者は、殆ど棄てゝ顧みざる有樣である。民間の實業家敎育家又は公共事業に盡力した者で、勅任官丈けの朝廷の待遇を受けるといふ事は、先づ六ケしい。近頃は民間の功勞者で死際に稀れに位階を賜はる者があつても、六位か五位に過ぎぬ。宮中席次の如きも、本年二月十五日の改正令に據ると、第一階から第十階までも區分があるが其の中に民間の者と謂つては、單に公選の議員位である。同じく國家の優遇を受けて居る學位受領者の如きも、又た國家から其の功勞及び名譽を表彰せられて居る藍綬褒章受領者の如きも、無位無官の者は、一向存在を認められて居らぬ。皇室は國民榮譽

の源泉である、既に四民にして平等と爲れる今日、民間者と雖も、相當の地位に居り若しくは功勞ある者には、平等に皇室の恩典に浴せしめたいものである。殊に博士の學位は位階と同一性質のものであれば、之を除外したことは、稍々遺憾ではあるまいか。君主專制又は封建時代の如く、四民が平等でなかつた頃は、治者が獨り朝廷の恩賞を稱することは、餘儀ない事でもあつたらうが、今日の進歩せる日本に專制時代封建時代の遺習を存することは、奇怪千萬である。刑罰の方も、それと同樣で、官民の間に餘程依估の差別があつて、政府又は政府に緣故ある者は、惡事を働いても容易に罰せられないが、それが民間者であると、毫も假借せらるゝ所がない。近い話は大浦事件の如く、犯罪者が有位有爵者であれば、隱居さへすれば罪は問はれないが、民間者であつたらば、とても牢屋へ打ち込まれずには納まらないであらう。勿論是れは稀れな一例かは知れぬが、前宮中顧問官周布男、前宮相田中伯、同渡邊伯、前首相山本伯

の如きも、バレぬ前に引込んで了へば、刑事政策とかいふ好名目の下に、必ずお構なしと爲る樣な所を見ると、法文上明白なる一國の刑罰でさへ、却々公平に行つて居ないことが分る。斯く一國の賞罰が偏頗で、政府又は政府に緣故ある者に厚く寬るく、民間の者に薄く嚴なのは、此の進歩したる國家社會に取りては、實に昭代の大缺典とすべきであつて、賞罰が官民に依つて厚薄寬嚴の差ある樣では、一國民心を鼓舞奬勵して、四民をして相ひ俱に忠誠を皇室に捧げしめ、國家をして富强の域に進ましむる所以でない。殊に一國の恩賞が、今日の如く或る一部の階級人士に限られて居る樣では、民間の奮發心といふものが全く無くなつて、國民元氣の消長に關すること甚だ大なるものがあらう、是れは何うしても今回の如き大典を機會とし、若し恩賞の優旨が降る樣な事があつたら、是非とも大に民間者の功勞を錄して、相當の授賞ありたきものである。

斯く國家の賞罰が公平を缺き、獨り政府及び政府の緣故者に厚く寬るきのみならず現在の不完全なる褒賞條例なるものが、有效に活用せられて居ないといふ事は、遺憾の次第である。我が褒賞條例を見ると、綠綬藍綬紅綬等の區別があつて、或は公共の事業に盡瘁して功績あり、或は產業を興して民福を圖り、我は危險を冒して人命を救助する等の功勞ある場合に授與するものであつて、其の趣旨は勿論結構な事であるが併し紅綬章は「自己の危難を顧みず、人命を救助したる者に賜ふものとす」とあるも醫師は其の危險を顧みずして、猛烈なる傳染病者及び病毒と常に戰ひ、その患者を救濟し、又は國家の損害を豫防しつゝあるも、從來醫師で紅綬章を得たといふ者は、聞いたことがない。又た藍綬褒章の規定を見ると、「學術技藝上の發明改良、著述、敎育術生、慈善、防疫の事業、學校病院の建設」云々とあるが、醫師にして其の學術技藝上の發明及び改良を爲せし者も尠からず、社會を裨益すべき著述を爲せし者も尠から

す、殊に衛生防疫の事業に就きて功勞ある者は、擧げて數ふべからざる程であるが、醫師で藍綬褒章を得た者は、一人も無い樣である、青山博士北里博士の樣な醫界の偉功者でも、藍綬褒章は貰つて居ない。吾人が醫者であるから、殊更ら斯く言ふ譯ではないが事實は否定することが出來ぬ。褒章に就てもう一つ述ぶべき事は慈善を爲したり、公衆の爲めを圖つたり、又は奇特の行ある者に、金銀木杯を賜はる例であるが、それは我邦では歴史的の物であつて、決して惡いとは言はぬけれども、時勢の進歩から見て、餘り適當した物とも考へられぬ。殊に近頃は禁酒主義の人も少くないから、拜受して難有迷惑な者もあるであらう。若し他に代はる物があつたら、是非改正をしたいものである、もつと精神的に有効に善行を表彰したいものである。

次に照代の缺典として擧ぐべきは、國民的禮服の事である。此の進歩した大正の新時代に、國民の禮服といふものがまだ一定して居ないといふことは、國家の一大不面

目である。現在普通に禮服といへば燕尾服であるが、燕尾服は公定禮服ではあるが、國民的禮服ではない。既に國民禮服といふ以上、一般國民に共通して用ゐられ得べきもので無くてはならぬ。然るに燕尾服は官場或は一部階級の禮服としては、或は適當かも知れぬが、國民禮服としては第一日本に疊といふ物が全然廢止せられざる以上は靴を穿かねばならぬ禮服は、何うしても不適當である。第二は原料を外國から仰がなくてはならないから、國産奬勵の上から言つても。大に不利益である。第三は代價が高くして國民一般に著用せしむるといふ事は到底出來ぬ。第四は羅紗といふ品は、我邦の樣な濕潤の氣候には甚だ不適當で、一夏も不用意に仕舞つて置いたらベソベソに朽ちて了ふ、それを五年目か十年目に取出して着るといふのだから、却々厄介な代物である。第五は洋服といふ物は、總べて其人にキチンと寸法を合せて拵へてあるから親の時代に作つた物は、餘程體格の似寄つた者でなくては、子がお流れを着用すると

いふ譯に行かぬ、急場の時に一家流用といふ事も出來ぬ。故に燕尾服は之を概言すれば、我が國風民情に適合せざる禮服であつて、到底一般的に之を着用せしむることが出來ぬ。今回御大禮に際し、各地方の代表人民十餘萬に對し、特に御賜餐の御儀あり聖恩が全國一道三府四十餘縣に殘る隈なく行き渡るといふ事は、誠に有難い話ではあるが、禮服が燕尾服といふので、頗る當惑を爲した者も少くない。今は官吏及び有爵者を除き、フロックコートで差閊ないとといふ事には爲つたが、それでも判任官あたりの官吏は、まだ〳〵苦痛に感じて居るらしい。假しんば燕尾服が悉くフロックで代用出來得ることゝ爲つても、國民禮服としては五十歩百歩の話で、其の國風民情に適せざるに至つては、燕尾服もフロックも、勿論同一である。唯だフロックなれば、平生利用の機會が、幾許か多いといふ丈けである。されば我が國民的禮服として一般に用ゐしむることを得る爲めには、何うしても現在の羽織袴を以て公式の禮服としなければならぬ、尤も單に羽織袴といふのみでは、餘りに無制限であるから、多少の條件を附して、白襟の下衣、黑地の紋付、五紋羽織、それに袴といふ樣な事にしたら、それで十分威嚴を具へることが出來るであらう。さすれば官場又は一部階級の人士は、假し燕尾服が禮服であつても、國民一般の禮服といふものが一定すれば、平生の冠婚葬祭の諸儀式は勿論、今回の如き御大典に際しても、何等問題も起ることなく、何人も苦痛なしに廣大なる聖恩の雨露に浴することが出來るのである。

羽織袴を以て我が國民的禮服と爲すべしといふことは、殆ど國民の輿論と言つても好い。故に羽織袴を以て我が國民的禮服と爲すことに就ての管々しき理由は最早之を述ぶる必要は無いと思ふ。併し吾人が今ま茲に一言附加せざるべからざる一事は、勳章と、禮服との關係であつて、それは一般に甚だ注意されて居ない樣であるから、少しく説明することゝする。即ち現在の勳章佩用規定に據ると、勳章を佩用すべき服裝

は軍人なれば軍服、鐵道員巡査看守等なれば各々其の制服、さもなくば必ず燕尾服でなければならぬことに爲つて居る。略綬でもフロックコートでなければ、之を佩用することが出來ぬ。で若し其の勳章を授與された者が、相當の身分地位の人であれば、別に差閊はないが、然らざる者、例へば小學校教師の如き者で、多年教育事業に盡した功勞に依つて勳章を授けられたといふ樣な場合には、果して如何であらうか。折角授與されたる勳章であるから、之れを胸間に懸けるといふことは、本人に取つては名譽なことでもあり、又た胸間に懸くべく授與されたものであるから、之を佩用すべきが當然である。然るに小學校教師には、鐵道員巡査看守等の如く一定の制服といふものがない、若し勳章を佩用しようとすれば、其れが爲めに態々禮服を作らねばならぬ。所が斯る地位の人で、燕尾服だの、フロックなどを作ることは、決して何でもない事ではない。シテ見ると、勳章を貰つたが爲めに、彼等に取つては少からぬ金を費さなければならぬ。燕尾服一著だけの金があれば、彼等の父母妻子は何れ丈け幸福に暮らせるか知れぬが、それを平生殆ど用のない禮服の爲めに投じて了ふことは、屹度相當に苦痛であらう。それならば作らずに置けば好いといふかも知れぬが、併しそれでは折角授與された勳章を佩用して名譽を表はすことが出來ぬ。幸に鐵道員巡査看守等の職に在る人ならば、其の在職中は佩用することも出來るが、さもない人は、遂に一度も之を佩用することなくして濟んで了ふ樣なことに爲る。何にも勳章を胸に光らせて徒らに勳章を世に誇るにも當らぬ事で、殊に教師の如き、天爵を以て尊しと爲す者は、問題にすべき事柄でないが、元來勳章なるものが胸間に懸けて勳功を表彰するが爲めに作られたものとすれば、これでは甚だ其の趣意に悖る譯である。禮服は此の點から考へて見ても、何うしても我が國風民情に適應し、最も一般に行はれ得べき羽織袴とすることが、何より必要な事で、勳章の如きも亦た此の國民的禮服たる羽織袴に

も佩用し得らるゝことに改正をしたいものである。少くとも略綬なりと和服に應用し得ること、爲したいものである。

斯く我邦は維新後僅々五十年間で、世界に類ひなき、迅速の進歩を遂げたに相違ないが、進歩の迅速な丈け其れ丈け、政治上社會上の缺陷も一層多く、差當り斯の國家稀有の大典に際し、吾人の聯想を禁じ得ざるものは、國家の賞罰と國民禮服との事である。此の二事は昭代の二大缺典として、茲に之を指摘することは、決して不穩な事ではあるまいと信ずる。今や御大典に際し、畏き邊りにては夫々功勞者に對し、恩賞の御沙汰がある樣にも承はつてゐる、如何はしき實業家に授爵などは別として、若し左る思召があるとすれば、從來の官厚民薄の弊を打破して、成るべく多く民間の者が、聖恩に浴する樣ありたいものである、而して同時に又た此の機會を利用して、それが今後永く一新例となりて、國家の賞罰少くとも恩賞が、偏重偏輕なき樣希望に堪へないのである。國民禮服の事は、鳥渡御大典からといふ譯には行かなかつた樣だが、併し御大典に依つて、國民が一般に其の制定の必要を痛切に感知したる事實は爭ふべからざる樣であるから、是れ又た今次の御大典を機會とし、當局者たる者須ら國民の輿論を容れて、羽織袴を以て國民禮服として採擇すべき樣、一般に公示ありたきものである。此の二事にして、果して吾人の希望の如くなるを得ば昭代の缺典も之により其の一端を補ふを得て、一等國たる帝國の體面も、多少は修備せられ、社會的にも眞に進歩向上を見得ること、爲るであらう。御大典に際し、平生の持論を述ぶることは亦た是れ野人献芹の微意に外ならぬのである。（大正四年十二月十四日日本及日本人）

新發見の社會に及ぼす影響

人の性分を改造する方法としての視格矯正法

孟子の所謂性本善なりとか、荀子の所謂性もと惡なりとかは、予の此處に論ぜんとする次第ではないが、人の性格習癖等を改造せんが爲の方法中に、予は予の斯の治療法を數へたいと思ふ。人心を改善するのは、實に國家及人道の最大にして、然も最緊急の事でなければならぬ。宗教家は熱心に叫んで之が爲に奮闘して居る。教育家は孜々として之に努力して居るのみならず、爲政者は不絶此問題を其頭腦から離したことはあるまいと思ふ。夫の庠序學校より教會佛舍の道場に至るまで、切に此問題を完全に成功せんことに日も維れ足らないのみならず、或は懲治の目的を以て勞役を課するとか又は所謂社會的の制裁を以て之が改善を促すとか細は小學校家庭等の叱責より、大は道德法律の支配に據る制御に至るまで、あらゆる機關方法を以て之を教戒し、若しくは誘掖しつゝあるのは誠に結構な事で、人心の善良はやがて國運の發達となるのは解りきつた事である。近時人心漸く歸向を誤らんとするが如き傾向あるに際して、世の政

治家が熱心に此方面に留意しつゝあるのは、國民として正に感謝に値するわけである。

教育も宗教も將た又政治も、實に人を善良に導きつゝある、立派にして必要なる機關であることはいふ迄もない儀であるが、世の中に若し其人の身體に隱れたるか又は發見し得られざる病的缺陥が潜んで居て、之がために其人の性行が直行せず、ともすると偏執のやうになり、それが爲めに非德義の行爲をなしたり、甚しきは刑辟に觸れるやうな擧動でもなすやうなことがあつたならば、素々所謂性は善なる無垢の良民善人が大へんに誤られたる批判を受けねばならず、どうかすると一度び此災厄に遭ひて其本然の軌道を逸して、終にあはれ自暴自棄となつて、あたら人の子をして、取返しのつかぬものとして終ふやうな場合がないでもなからうと思ふ。或は之が其症狀增惡して已に精神病者であるなど稱せらるゝに至らば、世の人も之に向つて嘲笑的同情を以て

冷評する位に止まるげれども、其病未だ充分に外に形はれざる場合、若しくは醫人と雖も是れが檢索に盡力するに非ざれば、容易に發見せられないといふやうな不幸な病氣を有つて居る人に對しては、實に衷心から其薄倖に同情せねばならぬことゝ考へる。更に之を小にしては、一家の家庭で學校の成績が思はしくなかつたり、怠惰であつたりなどする兒供があつたり、又は商工家の徒弟などで捗々しく仕事が進行せぬとか、居睡りばかりするとか、寢小便をするとか、其他色々な習癖がある爲めに、無暗矢鱈に父母の慈愛の笞を受けたり、主人や番頭さんの癇癪的お小言ならばまだしも、往々にして十露盤などのお見舞を受けたりするやうな可憐な場合が多々あると思ふ。

夫の軍隊などで一隊に長たるべき人々に、生理的の素養が必要であつて、其部下の身體の狀況に注意して命令を發するために、各個夫々異なつた身體を有つて居る多數の干城の身にも、過ち無く治まつてゆくやうな譯で、どうしても家長たる人や店長たる人々は、其家族又は店員等の健康狀態に留心して、而して之を勘定の中へ入れて其人間の短所又は缺點に對して貰はねば、本統でなからうと信ずる。

身苟も怠るべき原因あり、遲鈍なるべき故障あつて、終に之を長上に知られず、只一筋に性格不良と斷定せられて、其治療どころが逆まに鞭韃叱責せらるといふ境遇に在るもの程氣の毒な事はなからうではないか。

予が稱導實驗せるところの視格矯正法によつて、神經的諸種の疾患が治癒せられて其患者から續々禮狀を寄せられるのを讀むにつけ、不圖思ひ付て右に述べたやうな開拓に注意したならば、是れは決して自分一個などの小さな問題ではなく、往〳〵は人を救ひ世を濟ける一端となることであると思はれる。

かの有名なる前東京醫科大學教師ベルッ氏が、其著書に神經衰弱の原因を說いて、日本の學生は勉强に過ぎて、其試驗前等には殆んど定型的に本病の增加を見ると慨嘆し

て居るが如く、實際修養期にある青年が頻々とし斯病に冒され、心を靜めて讀書すること能はず、徒らに煩悶憂苦して悲歎の境に彷徨するものは、日一日に增加せんとする傾向を示し、可惜俊秀の才を空しく馬蹄の塵の中に葬らねばならぬ運命に縛らるゝことは單に個々の生命に關するばかりでなく、國家の一大損失であるといはねばならぬ。

惟ふに勉學に際し最も主要なる役目を負ふものは、言ふまでもなく眼其の者である。從つて生存競爭の激烈なる今日、勢ひ眼の使用を多からしむぬのは當然の理で、若し先天的異常が存在して居たならば、必ずや調節力を過度に働かせて、自ら腦に故障を及ぼすに至る譯である。

今や幸にも予が專門の領域に於て、多少の努力を惜まなかつた結果、着々會心の結果を收めつゝあるのは社會國家にとりての一大福音といふも憚らざるべく、世の神經

衰弱に悲痛の日送りをせられつゝある諸君は、一刻も早く、精確なる視格の檢査を受けられ、以て積年の苦惱を洗ひ去り、勇奮一番世に活躍せられむこと切望する次第である。

こゝに努力の人があつて、學界の爲に一事を發見し、これを發表せんとする場合、偏狹なる島國根性の周圍は、是は快擧なり、美事なり、好發見なり、新事實なりとして、歡んで之を迎へ、或はともゞ〳〵其業績を成就せしめやうと勉むることをせず、ともすると之に恥づべき感情問題まで挾んで、只管に之を無効に歸せしめやうとする阻害的行動に出で、動ともすると脫線的に其發見者の人身攻擊まで持ち出し、あらゆる方法を用ひて邪魔をしやうとする、さもしい根性がないでもない。

そこへ行くと西洋などでは光風霽月、苟も學界に貢献し國家社會及び人間を裨益すべき業績に向ては、多大の敬意を以てこを迎へ、其成功を祈ることに勉めて居るのは

實に文明的で、我國の學界に於ても追々かゝる好風潮を生じつゝあるのは、稍人意を強うするに足ることである。

學術上の發見の如きは、決して其發見者個人の仕事ではなく、大なる國家的事業であらねばならぬのであるから區々たる毀譽を顧みず飽くまで其確信ある創見に向つて猛進すべきである。本事業に就いても近時そちこちに略同樣の報告が現はれたり。吾人に贊成の論文が出たりするやうになつて來たのは、吾人の共に愉快を感ずると同時に、眞理は終に彼岸に到達すべきものと益々努力の臍を固めた次第である。

（大正四年十二月二十日眼と神經衰弱）

神經衰弱症の豫防法として將又近視眼の豫防法としての光力使用上の注意

世道若くは人心の爲めに、或る目的に向つて自己を犧牲として、所謂椽の下の力持ちをするのは寧ろ美擧であつて、時としては必要事に屬するのである。けれども夫れと是とは似而非なる結果の可ならざるを知りて尙ほ且つ之を將來すべき努力をなすのは抑も是を愚と云はずして何んと言はう。

けれども其事柄がソンなに宜くない事であるのを知らず、無意識にやつて居るのは實に憫むべきである。

（一）世をなべて物を見んとするに、其物體と我眼との距離を近からしむべく脊を蹐める人が寡くない。夫の諸種の事務家、坐業の人等が態とらしく跼くまつて其職を執りつゝあるのは非常に多いと思ふが、是は其人の眼の調節機を使用すること過度となつて、折角の貴重なる機械を損じることゝなる。而して其結果は實に神經衰弱迄惹起するのである。

平凡なる事理ではあるが、言ふべくして行はれ難きは、かゝる瑣細な事柄である。さうして其僅かな不注意が比較的大なる惡影響を齎すのを考へて見たならば、吾人は決して之をつまらないことだと言ひ得ぬのである。然らば姿勢を正しくして決して跼蹐迂餘たらず、脊椎を正常に保ち溢りに面首を下げ若くは傾けず、背を抂げず下腹に力を入れて胸を張り、所謂氣海丹田に心を置くが宜い。

普通の五號活字の大きさならば、鯨尺の一尺二寸から一尺五寸位で大丈夫讀書算筆に差支へるものではない。六號活字ですから一尺二寸の距離で明視することが出來る。

夫の春霄輕暖の時睡魔漸く襲はんとする隙に、チョイトとばかり假睡の甲斐なき手枕にほの暗き軒端の影に書を繙き、又は簟の冷え心地宜き初夏の黄昏に打臥せとなりて會心の書を誦せんなどは、眼と物體との距離往々六七寸迄に縮まつて居ることが多

いから、かういやうな讀書等は一切無用とせねばならぬ。

人若し椅子にかゝりし仕事をするならば、平面の机に對ふよりは斜面のソレを適當とするものも皆此理に因るのである。

(二)室内の光線不足ならば讀書にも算筆にも自ら眼は物體に近づいて往くか、又は引力でもあるかのやうに、知らず々々に物體を眼に近付けるやうになつて、前に述べたやうな結果を來すから注意すべきことである。といつて光線が餘りに烈しく直射する處では人は此の過度の御馳走に飽食して、却つてクラ〳〵と幻朦を起すから之亦避けねばならぬ。之には其光線を適度に遮る爲めに、白色の窓懸を準備するのが上策である。猶又此の道理の下に各室の窓と床面との面積の關係を一と五とに定めるを宜しとするのである、即ち床面が五坪ならば窓は少なくとも一坪といふ割合である、又光線は上方から射入することを忘れぬやうにせねばならぬ。兎もすると誤解された勤儉

の家庭では、其部屋の窓や障子を帳簿の反古なんどで貼つて、得々として御座るのがないでもない。所謂一文惜みの百失ひとやら、墨のついた紙でも光線を透すものと思つて居る。無智の象徴であつて愧づべき事である。

（三）かくて吾人は宵闇を忍んでも、燈火の節儉をするの愚を嘲らねばならぬ。勿論太陽西山に沒したる後は、吾人は光を人工のそれに求むべきは解りきつた事柄であるから、其少しでも日のボンヤリとして來た誰そ彼れ時には、速に燈火を點けるを要するのである。

昔者、我萩生徂徠先生、日暮尙書を放たなかつたと傳へられて居る。享保の其當時に於ては實に美談であるけれども、之を大正の今日では衛生上の見地から云はゝ、不攝生の擧と謂はねばならぬと思ふ。吾人は諸君と共に此の場合唯だ先生の勉强力を嘆美して、夕方には早速燈火を點けやうではないか。（夫の有名な車胤が螢光に依つて勉

學したといふのも、亦之に類する事である）

於茲吾人はさらば其工人光線の種類に就いて、どれが最も適良であるかを研究して見たいと思ふ。今日では曰く石油、曰く瓦斯、曰く電燈と解りきつた話であるけれども、一寸間誤付かぬでもない。瓦斯はアウアー氏のマントルが發明せられてから、極めて明るくて價格も廉いけれども、熱を多く發し過ぎるといふ短所があるのと空氣を汚すのを厭ひたい。電燈は其明度と價格とに於て瓦斯に劣るけれども、熱を發するのが寡いのと、空氣を汚染せぬといふ長所がある。較べ來ると先づ以て勝負無し引分けといふ格がある。石油とて今日では其ランプにマントルが出來たものだから、結構であるのみならず、電氣瓦斯を利用し得ぬ山村水廓では之れでなくてはならぬといひ條、單に衛生の上に之を電氣、瓦斯の燈火に比較することは出來ぬ。

かくて兎も角も其日光にあれ、將又何れの人工光線にせよ、其射入の方向は常に左

上方から之をを求むるやうにするのを、理想的であると考へる。（大正四年十二月二十日眼と神經衰弱）

醫師の廣告に就て

社會生活は皆相對的のものである、醫師の業務に於てもまた斯の如く一ありて他を缺く能はず、醫師が患者に對した場合に初めて醫師の務を全ふするものである。故に予輩の今述べんとする所の醫師の廣告もこの兩者をして相接せしめ、醫務の完全なる遂行と圓滿なる治療とによりて醫師は其職責を盡し社會はこれによりて利益を享ける樣にしたいものである。名醫を知らぬのは不幸の一であると古聖が云つた通り、世間で住々或病に罹つても適當なる醫師の存在を知り得ずして苦み且つ躊躇する間に尊き治療期間を經過して再び取返しがつかぬ樣な破目に陷るのは屢實驗する處で誠に悲慘

の極と云はなければならぬ。於是醫師として門戸を開放した以上は自己の存在を世間に知らせる事の必要が自他共に生じ來る。其手段方法は今此處に述る事を差控るが世間では往々醫師の廣告を目して商人化、俗人化として大に排斥する樣である。是は程度問題ではあるが畢竟或は意味から見て如斯傾向が一部の人士の間に行はれたる事實だから此批評を受るのも止を得ぬとするより當分は致方がない樣だ。然し元來醫師なるものは各階級の人の病を醫する職業で決して單に知識階級の人のみを治療するものでない、如何に知識の乏しいものでも依頼を受ければ一定の理由なしに辭する譯には行かぬ、多々益々便せんがために廣く世間に自己の存を知らしむる必要がある。處が醫師の教育が漸次進んで他の階級よりも一歩高尚であるの故を以て徒らに上品振て構へてをるものもある樣ではあるが醫師本來の義務を遂行する上から見て桃李不言下自成蹊と唯々自然の成行を待つのはチト考へるものではなからうか。

今度某醫師會に醫師の廣告制限に關する建議案が出た一應結構ではあるが其原案中には醫師の性質を無視したるものがある樣に思はれてならぬ。この案は獨逸の例を倣へるもの丶樣に思へるが然しながら例の醫藥分業の夫れの通り一から十迄總て外國の制度習慣が最善のものとのみは思はれぬ、成程獨逸の如き國では醫師相互の權利義務の觀念が發達して居る處であるから自己が診斷又は治療し難しと思へるものはて他の專門家に送るが如き良風美習が存してをる從て患者に於ても迷ふ事なく適當なる醫師の診療を受ける事が出來るけれども翻て我邦を見るに遺憾ながらこれに反し不患人之不己知、患不知人也的と反對に醫師對醫師の道德の行はれない否寧ろ醫師間に於て私利私益をのみ圖らんが爲め他の醫師を誹謗排斥するが如き事の行はる丶國に於ては醫師が廣告を以て自己の存在を知らしむるは止を得ざる處であると考へられる、然れども其廣告法に於ても元來醫師の職務は高尚なるものであつて決して野卑なる町人的根

性を以てすべきものに非ず陋劣なる手段を弄する事なく充分修養したる人格の發露とも見るべき方法を執らねばならぬは尚更贅言を要しない所である。

醫師法に依れば如何なる方法を以てするも自己の技能療法に關する廣告は禁止されてあるが予輩をして忌憚なく云はしむればこれは寧ろ御當人よりも他の同業者がドシドシ世間に吹聽する事が必要であらうと思はれる、例へば甲は內臟外科の手腕が非凡だとか乙の成形手術は一寸眞似し兼るとか或は丙のトラホーム手術は天品なりとか丁は何戊は何と他人の及び兼る獨特の妙技を備へてをる事を詮穿したら意外に多種多樣形而下に潛んでをる事であらうと推察する。元より之を探り出して吹聽する樣な餘裕がないと云はれるかも知れぬけれ共御互自分の事だとすれば左程御懸念御無用と申したい。それがとりもなほさず御互の爲社會の爲人類の幸福の爲有益なる事と確信する。

然し世間は色々で修養の乏しき輩がありて俗人の醫事に暗きを奇貨として滔々誇大

的瞞着策を講ずるものなきにしも非らず。斯る場合には社會的に可然制裁を加へ再び立つ能はざる程に致したいものであると考へる。猶治療なり、診斷なりの新業績を成就せし場合には之を先づ詳細に學會に報告した上に堂々と廣告をなすも可なりであつて、其新しき方法によりて社會全般を救ふ事が出來れば、實に醫師の天職が全うされた譯で其効績は永久に不滅であろうではないか。

然らば如何にして下品でなく野卑渉らず高尚に社會全般に自己の存在を認めさせべく廣告をなすべきであらうか、コレが諸君と共に予輩の大に攻究研鑽せんとする最後の問題にしてまた一大難問題たるを失はない。敢て大方諸賢の示教を俟つ。（大正四年一月一日醫海時報）

官吏の暑中休暇

人の身體といふものは、心の持ち方で隨分何うでもなるものである。冬の日に二重障子を立て切り、隙間漏る風さへ通らぬやう防禦工事を施し、炬燵にしがみ付いて居ても寒い時には寒い。かと思へば朔風骨を劈くやうな寒氣凛烈の日に、脛もあらはに車を輓いて居ても、さのみ苦痛と思はぬ者もある。蟬聲も尚ほ微かに、まだ盛夏の候にも入らぬ中から、暑さを海に山に避けても、矢張り暑い暑いと言つて暮す者あれば、又た一方では灼熱金石をも鑠すといふ酷鑠の日に、日蔭も擇ばず炎天に身體を曝し、瀧の如く流るゝ汗を事ともせず、劇しい勞働に從事して居る者もある。これに就て何時も思ひ起すのは、暑中休暇——殊に官吏の暑中休暇——である。官吏は毎年皆な相當日子の暑中休暇を賜はるのが例である、彼等の多くは身體の勞働でなくして、頭を使ふ側の仕事であるから、斯る人間を身體の强健な勞働者と同一に論ずることは、固より出

來ない話であるが、併しながら此の暑中休暇なるものは、官吏に取つて實際上果して必要缺くべからざるものであらうか。其の事務の性質上殆ど同じやうな仕事をして居る銀行會社員の如き者には、暑中休暇は大概無いやうである。例令あるにしても夫れはほんの僅かである。けれども、彼等は皆なそれに耐へて、能く仕事を仕終うせて行くではないか。若しも官吏が盛夏の候には健康上とても執務することが出來ぬとすれば、銀行會社員なども之に耐へぬ譯であるが、事實は決してさうでない。して見れば、暑中休暇は官吏に取つて絶對に必要なものではないと斷言することが出來る。元來日本の官衙は、其の事務に比して人數が多ほ過ぎる。故に執務時間中に、煙草を燻らして、雜談に耽つて居られるのだ。又た夫故に暑中休暇の如きものを設けても、さして支障を生せぬのである。矢野恒太君は其著書藝者論中に於て、官吏の無能怠慢を痛罵し、若し「帝國政治請負株式會社を設けて、我邦の政治一切を請負うたら、政費を

三分の二位にしても猶ほ五割位配當が出來るだらう」と論じたことがある。勿論これは一時の諷刺の言ではあるが、萬一さういふ風の會社が出來たとすれば第一著に行ふべきは、他の銀行會社と品じく暑中休暇を廢止し、各人の全能力を適當に働かしむる方策を講ずることである。斯くせば今よりも遙に人員を淘汰し、經費を節減した上に人民は必ず幾らかの租稅の割戻を受けることが出來るであらう。全國官吏の暑中休暇は、之を延べ時間に勘定すると莫大の時間と爲る、其の存廢は、國勢の盛衰消長に關する所、決して少なしとせぬ。最近の歐電に據れば、英國勞働組合聯合會議では、戰爭の終結まで總ての休日を廢止するといふ愛國的決議を爲したといふ事である。我國の現在は英國のやうな戰爭情態ではないが、國家今後の多艱多事にして國民の奮發努力を要すること、決して英國の比に非ざることを知らば、一般國民就中官吏たる者は、我國を以て英國以上の戰爭情態と心得べきである。官吏の暑中休暇は少くも國家が眞に

或る目的を達成するまでは、斷然廢止すべきである。それも暑中休暇を取つた爲めに、彼等の健康に好結果を及ぼすならば兎もかく、何の爲す所なく、怠慢に又は放恣に日を送つたが爲めに、却て肝腎の健康を害する事實の極めて多きは、暑中休暇の寧ろ弊害あつても利益なきことを證據立てるものではないか。此の點からして彼の學生に暑中休暇の餘り永いのも一考すべきであらう。（大正五年八月十五日日本及日本人）

學術進歩の阻礙者

西歐文明の輸入されてから、我國の文物は非常に變遷したのであるから、過渡時代の弊として模倣を之れ事とするといふことも、已むを得ぬことでもあつたらうが、今や我國も既に模倣的時代を經過したのであるから、今後は是非とも諸種の方面に於て獨立しなければならぬ。僅か五十年の間に世界的大發見の澤山出るのを希望するのは、

或は無理な注文かも知れぬが、是れからは宜しく獨創的時代に入らなければならぬ。然るに由來日本人には獨創の才が乏しいと云ふのは、一般の定評である。人のやつた跡を見て、之を眞似ることの上手な模倣的人種だといふのは、強ち外國の口惡連中のみの言として聞き流す譯には行かぬ。口惜しい事だが、事實上之を否定することが出きぬから致し方がない。所で今さういふ獨創の才に富んだ人が萬一我國にあつたとしたならば何うであるか。其人は國家の原動力ともいふべく、金銀財寶を山と積んでも得難いた活きた國寶である。今日歐洲戰爭に於て何國が最も强いかと云へば、知識ある野蠻人たる獨逸で、野蠻人の其の知識卽ち學術上に於ける獨創の力が、歐洲の諸强國を向ふに廻はして、敢て後れを取らぬ所以である。故に我國に於ても今後國際の競逐上最も重大の地位を占むべき斯る才能の士が出たとすれば、國家たる者は相當の注意と考慮とを拂つて、十分其の本能を發揮させることが必要である。器械でも油が無

ければ動かぬと同樣に、幾くら才能があつても、周圍の事情が十分其の才能を發揮するに便ならざるやう出來て居れば、天才は永く草野に埋沒して一生顯はるゝの機なく國家の損失擧げて數ふべからざるものがある。然るに何ういふものか、我が學界の現狀は、斯る事を些とも重要視して居ないのみならず、唯だ一口に理想に過ぎぬと葬つて了ふ、誤れるものである。而して今ま之が原因に就て考察するに、自分は二箇の大なる理由に歸することが出來る、卽ち一は學閥で、一は官尊民卑である。官尊民卑は封建時代の遺物で、既に過去に屬すとはいふものゝ、まだ〳〵決してさうではない。今や知識は一般に普及し平均して、朝に立つ者のみが豪いとは云へぬのであるが、尙ほ官途に在る者は、其說の行はれもするが、野に在る者の絕叫は、其の反響は全く微弱である。又た學問の發達に最も忌むべき學閥は、常に自己の後進者を擧ぐる爲めに有する便宜を與へて他は一切之を顧みないのみならず、或は之を陷れることをさへ謀

らんとする學校に於ける修學の時間の長さは、敢て其の人の才能のバロメーターとなるものではない。學校に永く居ても、懶惰放逸遊蕩に日を送れば、四年五年は實力上他の三年にも二年にも及ばぬであらう。今日の學問として、設備の完全なことは、最も望ましい事ではあるが、設備の不完全が必ずしも人材を作らぬとは限らぬ。外國の例に見ても、古びたる煤けた薄暗い教室から、世界に讃へられる碩學が多く出て居る。又た學校教育を受けざる人にも天才はある。我が醫學界に於て世界的の名を博した彼の野口英世博士の如きは、果して何うであるか。近時學問の獨立といふ聲が大分高くなつたのは、實に結構な事であるが、徒らに聲のみ高うして、學界の傾向が依然反對の徑路を辿りつゝあるは、矛盾の至りである。偉大なる獨創の才を抱きながらも、官途に在らざるの故を以て、又は學閥の中に居ないといふことの爲めに、遂に其の才能を顯はす機會なくして葬られて了ふといふのは、實に惜しい事ではないか。官尊民卑

又は學閥なる語は、人耳に慣熟すること久しく、最早生存期限を經過した言葉であるが我が學界の進歩發達を阻礙するものは、依然此の二者に外ならざる以上、予輩が陳腐の言も、尙ほ何等から新意義を有することを自信するのである。（大正五年八月十五日日本及日本人）

學校長と教授兼任

世の中の進歩を圖り、一國の利福を增進するには、多くの方面があるであらうが、其の中で最も必要と考へられる事は、人を巧く働かせることである。卽ち人材を適所に置いて、能く其の伎倆を發揮せしめることである、近頃の新しい言葉で言へば、能率の增進とでも稱すべきである。如何に立派な才能を有する者も、適材を適處に置かないか、又は其の人間をして十分其の技能を發揮せしめることが無かつたならば、國

家の人物經濟上損失する所決して少くない。これは各方面に於て同じ事であるが、自分は今ま多くの學校長に就て、殊に此の必要を痛切に感ずるのである。と言ふのは、高等學校及び高等工業、又は高等商業等の校長は、大概敎授の任に當らないで、唯だ單に校務の處理に關する事務をのみ執つてをるやうである。隨て殆んど一事務員の觀がある。けれども此種學校の校長の椅子に在る者は、皆な高尙なる學問、乃至は種々の專門學に於て相當造詣の深い人々のみである。斯る國家有用の材をして、生徒に其の蘊蓄を分たしめず、徒らに校長室に蟄居して、校の雜務に類する仕事に當らしめて置くといふことは、個人及び國家の能率增進上、果して之を合法的と言ひ得るであらうか。斯く言へば或は校長の職は一校の監督、敎職員の統率、敎育方針の指示又は外部との交渉、其他諸般の事務に關して、隨分肩負ひ切れぬ程の仕事があゞと云ふかも知れぬ。或は其の通りであらう、併し之を全國各醫學專門學校の校長に就て觀察した

ならば何うであるか。彼等は皆な專門の學科に於て、夫々教授時間を持つて居る以外に、病院にては患者の診療に從事し、尙ほ其の上に病院長をも兼務してをるのである。醫學專門學校長としての職分は、決して他の高等學校長や專門學校長に比して容易ではない。而も能く自ら教鞭を取るの外、尙ほ幾多重要なる職務を有して居るのである。醫學專門學校長既に教授を兼任して、斯く綽々餘裕ありとすれば、他の學校に於ても、決して校務專任の校長を置かなければならぬといふ必要が無い筈だ。我國は維新以來長足の進歩を爲したとは云へ、學術に技藝に、商工業に、其他諸般の方面に於て、歐米諸國に比し尙ほ大なる遜色がある。殊に此の國家及び國民の全力を擧げて一國の富强を圖り、相ひ與に外に向はざるべからざる此の重大時期に當り、有爲の人材を殺して使ふといふやうなことは、實に國家の人物經濟上、不經濟の甚しいものと謂はねばならぬ。今日の文明は言ふ迄もなく、時間竝に人物經濟の歷史である。故に以上の學校

長の如きも、大抵夫々專門の知識を有する人材である以上、事務員の如き事務にのみに携はらしむることなく、別に教授の任にも當らしめ、又は他の必要なる方面の仕事をも兼務せしむることは、國家及び個人の能率增進上極めて重要なることであつて、問題の小範圍なるが爲めに、決して等閑視すべきことでない。（大正五年八月十五日日本及日本人）

謹んで各醫專校長を頌す

予輩曩きに「日本及日本人」誌上に「校長利用論」を力說して置いたから、多方賢明なる大方諸君の御注意を惹き、續いて御配慮をも煩はした事と信ずるが、今又玆に又禿筆を揮つて予輩の所信を諸賢に愬へ、以て共々に感謝の誠意を表したいのは彼の各醫學專門學校長諸氏の日夜職務の爲めに盡瘁せらるゝ献身的努力其の物に外ならぬので

ある。

御承知の通り同じ專門學校令の下に校長になるにしても、醫學專門學校の校長は、他の高等工業とか高等商業乃至は高等農林學校の校長連とは違つて、單に校長として校務を支配するのみならず、更に病院長を兼任し、其の上尙ほ敎授として自己の專門に關する學科の講義をさへ擔任するものなり、又單に病院長として一般の院務を指揮監督するに止まらず、更に進んで親しく患者の診療をも受持つもの多きに至つては、眞に其の多忙さ加減名狀すべくもあらず、只々よくも彼麽に働けたものだと只管感心するの外はないのである。

今試みに各醫專校長に就て見るに、千葉醫專の三輪德寛博士は校長たり、外科の敎授たり、病院長たり、更に外科の部長として日々外科患者の治療手術に從事し、岡山醫專の筒井八百珠博士も亦之れと同樣校長たり、院長たり、外科の敎授をも擔任

し、金澤醫專の高安右人博士は眼科に其の蘊蓄を發揮し、長崎醫專の田代正博士も病院長として外科に名を馳せ、新潟醫專の池原康造氏の內科に令名あるも皆人の知る所である。近く新に大學と改稱された大阪府立醫科大學の佐多愛彦博士は學才共に非凡の譽れ高く、學長として院長を兼任し、更に敎壇に立つては肺癆科を擔當して又寧日なく、京都醫專の望月淳一博士は內科の講義に平素の蘊蓄を傾注して流石に大家の名に負かぬ態度を示し、愛知醫專の新任校長山崎正董博士が院長を兼ぬるや忽ち多年院校內に蟠まれる盤根錯節を一掃して院校共に其の面目を一新し、今後益〻改善の實を擧げんとしつゝあるは內外共に同氏の人格手腕に信賴し期待して已まぬ次第であつて、博士亦其の專門なる產科婦人科を講じ、次で診療にも從事する點に於て決して他校長の人後に落ちないのである。熊本醫專の谷口吉太郎博士が院長を兼ね、搗て、其の專門科目なる內科に令名嘖々たるは說明する迄もなく、最後に東

京慈惠醫專の男爵高木兼寛博士が名譽校長たり、外科の泰斗たるは世人の既に業に熟知せる所にかゝり、是れ亦予輩の喋々するを俟たない所である。

以上一々擧げ來れば是等諸氏の日常の職務には多少の相違はあるにもせよ、孰れも皆他の專門學校長や高等學校長等が單に校長の事務をのみ鞅掌し、縱しや敎授の任をも擔當するにしても僅かに一週一二時間に過ぎぬものとは、其の多忙さ加減迚も同日の談にあらず、確しかに二人分乃至三人分の仕事を爲しつゝあるものと言ふも決して過言ではないのである。而も是等の校長諸氏が此の繁忙裡に身を處し乍ら、尙且綽々たる餘裕を示して絕ねず學理の探究に努めらるゝのは、事務家として將た又學者として實に予輩の敬服措く能はざる所であつて、諸氏の多くが夙に學界に何等か相當の業績を擧げて推薦にあらざる論文提出に依り學位を獲得されたのも亦當然の事柄と言はねばならぬ。

翻つて思ふに、諸氏の醫專に校長たる一事は、其の斯界に重視せらるゝ理由に依り、或は容易に贏ち得ざる地位なるに依り、將た又重要なる職責を有するに依つて、名譽は實に名譽である、世人の羨望に値するものなりと雖も、一方其の物質上の待遇は如何、成程校長以外に院長としては手當なるものあり、又診療に對しては夫れ相當に報酬ありと言へば一應尤もらしく聞えるが、更に實際に立入つて然らば院長としての職務俸如何、診療に對する報酬額如何、是等の報酬手當と市井の開業醫諸氏の報酬との比較如何を究むれば、其の少額なる迚もお話にならぬ位であつて、寧ろ同情に堪へぬと言はねばなるまい。況んや敎授としての報酬の如きは全然皆無であり乍ら、其の擔當時間數に至つては他の敎授專門の敎授連と必ずしも大差がない有樣であるのを知るに至つては、益々其の物質的報酬の薄いのは滿腔の同情を禁じ得ないのである。其の三面六臂的努力の一に献身的なのは毫も疑ふ餘地なく、小は校院の爲め、大は國家社

會の爲め、衷心感謝の念を起さゞるを得ない譯である。

予輩は今茲に一例を擧げて讀者諸君と共に次の美談を味ひたい、夫れは某醫專校長某博士が某日某所へ鐵道旅行を試みた時の出來事であつた、偶〻同車には前外務大臣たり、兼ねて同志會の首領總理として英名一世を壓する子爵加藤高明氏が同乘してゐたが、一向各驛に於ては出迎ひらしいものを見ることが出來なかつた、之に引換へ一方醫專校長の方は、其の旅行を聞傳ふるや其の學德を慕ひ舊恩に感じ、自ら列車の各驛通過時刻を見計つて沿線各驛に出迎へし卒業生其の數幾十なるを知らず、單に是等出迎ひに依つて報恩の萬一を期するに止まらず、校長の平素の嗜好物が果物なるを知るや、長途の旅情を慰めん爲めとて、孰れも皆期せずして果物を贈り、行く程に出迎へらるゝ程に何時しか校長の車室は果物籠が山積したので、流石の加藤子も之を見て遂に啞然たるに至つたと云ふ。片や一世に時めく大政治家、片や其の地位に於ては迚

も比較にならぬ一醫專校長で、人爵上取組にならぬは素より明であるが、而も兩者の對照には此の如き面白いものがあつた、之に由て見ても、善良なる校長が精神的方面に大勢力を有することは立派に證明して餘りあると思ふ。嗚呼之れある哉、之れある哉である。粉骨碎身異常の奮鬪と無慾至誠に三面六臂、迚も常人の企及し難い劇務に身を處して、只管國の爲め學問の爲めに一意專念献身的努力を爲しつゝある精神的偉大なる人物に對し、前記の如く縱しや物質的報酬は厚くないにもせよ、斯う云ふ精神的な極めて美しい報酬が與へられてゐるとは、流石に天の配劑は巧妙だと感心せざるを得ないのである。

さは云へ、只々權勢にのみ憧れ、黃金の魔力にのみ眩惑して、又他事なき滔々乎たる現今の惡潮流中に在つて、此の如き高尙なる精神的報酬にのみ生きんことは、迚も彼の尋常俗物輩の企及し得る所ではない、況んや金儲けとは緣の淺からぬ醫家に於て

をやである。是れ予輩の讀者諸賢と共に敢て醫專校長諸氏の献身的努力を感謝し以て其の德を頌せんとする所以である。（大正六年二月十日醫學及醫政）

既往の業績と目下の研究

余の專門は御承知の通り眼科である、隨つて御尋ねの研究事項と云ふのも、矢張り此の眼科に關することであると御承知が願ひたい。併し余の研究は有體に云へば彼の學者達の終日研究室にのみ沒頭せるのとは違ひ、臨牀家として日々家業なる患者の診療に從事しつゝ、其の傍ら研究を繼續して居るのであるから、隨分不本意な點も無いではないが、兎に角余としては終始眞面目に最善を盡してゐる積りである、中には或は相當の効果を擧げ、或は完成の域に達した事項も、一二には止まらぬのであるが、先づ順序として既往の業績の二三を述べて御參考に供し、最後に余が目下邦家の爲め、否な

世界人類の爲めに最大福音として、之が研究に全力を傾注しつゝある神經衰弱の療法に就て、聊か愚見を陳述し、以て折角の御尋ねに間に合せたいと思ふのである。

既往の業績

既往の業績と云へば如何にも昔話をするやうであるが、丁度日清戰役の頃、點眼瓶の色に就ての小實驗を報告したことがある。これは當時專ら世に行はれて居た藍色點眼瓶は、元來余の理想には何うも適當せぬので、余は黃色を以て之に代へ、種々藥品を材料に供して日光に對する比較研究を爲せし結果、遂に此の黃色瓶の方が從來の藍色瓶に比して、數等優れる事を證明したのであつたが、爾來時代の推移と共に、何時しか藍色瓶は地を拂つて、如何にも見當らぬやうになつて了つたのは、余の今昔の感に堪へぬ所である。當時余は又た淋毒性結膜炎卽ち俗に世人の最も恐るゝ風眼と云ふ病に、溫洗滌療法を創案した。此の病の慘狀は、眞に一刻を爭ふこと、彼の內科的重

症や、將又た傳染病の夫の如く、忽ち一家を擧げて失明の悲境に沈淪せしむるにさへ至る眞に危險極まるもので、マグヌス氏は盲人の大多數は、其の失明の原因が實に本症であると斷言した程慘澹を極むるものであつて、余は種々苦心の結果、之が救濟手段として前記溫洗滌法を創案するに至つたのであるが、今や本法は殆ど天下に普及して、恐るべき失明の大原因が何時となく驅除せられつゝあるのは、社會の爲め人類の爲め、全く余の愉快に堪へぬ次第である。更に明治三十七年に公表した角膜點墨術の視覺的關係に對する影響に至つては、余自身すら驚く許りの影響を與へ、歐洲の諸學者の如きは擧つて之に贊同し、從來單に形容の目的にのみ用ゐられて居た本法を、特に視覺的の夫に供して教科書を改訂するにさへ立ち到つたのである。實にや事實は權威であるとは云へ、余としては如何にも肩身が廣くなつたやうな心地がして、私かに誇りを感じた次第であつたと同時に、又た一面には之に依つて如何にも歐洲學者の雅量を證

明した譯で、毎も斯うした場合に遭遇する我が國の學界の島國根性に對して、全く羨望に堪へぬ一好例であると信ずる。其の他涙管狹窄病及び角膜瘻に對するフルオレスチンの確診法等の如きは、余の古き業績として更めて茲に述ぶべき程のものでもないが、唯だ茲に特筆したいのは、彼のトラホームに就てゞある。トラホームは吾等眼科醫の最も苦しむもので、此の頃では何うやら目鼻がついて大正五年四月に漸くトラホーム豫防會とか、何んとか彼んとか會が設立されて、盛んに其の豫防に腐心し、又た其の筋でも研究調査に努力されるやうであるが、日清役後の廿數年前本問題に關しトラホーム亡國論を絶叫して殆んど狂者を以て遇せられた、余をして忌憚なく言はしむれば、トラホームに就て今更ら周章狼狽するのは、抑〻餘りに遲過ぎはしまいか、一體世の識者とやらは、今迄本病に就て何を考へて居たのであるか、其の心事が疑はれてならぬ。見よ如何に本病が蔓延して社會に恐るべき害毒を流して居るか、若し一

度其の眞相に接したならば、何人と雖も屹度寒心に堪へぬに違ひない、統計を見よ、不幸にして我國は世界第一のトラホーム國ではないか、露西亞伊太利之に次ぎ、英國及び佛蘭西には極めて少なく、獨逸の或は地方には全然ないのである。更に數字で示せば、英國では僅かに一プロセントに過ぎぬのに、我國では驚く勿れ二十プロセントの多數に亘つて居る。而も此の恐ろしい病原がまだ少しも分つて居ない、ヤレ原蟲だ、ヤレ小體だ、ヤレ何だ彼だと學者が騷ぐ割合に、遂に發見されないのは、如何にも殘念至極な事である。是非ともトラホーム國たる我國の學界から發見して貰ひたい、否な發見する義務があるのであるが、偖て現今の狀態では、恐らく當分は發見されさうにもない、否な或は何時迄も發見されずに終るかも知れない、心細い有樣である、隨て其の傳染することだけは明かであつても、さて其の治療方法になると各自見解を異にして、一向進歩の跡が見えぬ、之が爲めに中には不治の病として居る者さへあるらしい。顧みて余は既に業に二十年前から本病の無痛根治手術を唱道し、時間を惜しまず出來るだけ多數の患者に施術し、幾多の障礙を切拔けて、漸く今日迄に漕ぎ附け、從來存在せる瘢痕を除去する譯には行かぬけれども、新に手術の爲めに瘢痕を形成することなく、諸般の繼發症を根絶せしめ、確實に再發を防止し得る所の極めて優良なる成績を擧げ、憐れむべき斯病者の爲めに、一大福音を與へて來たことを確信し、又た世人からも遂に認めらるゝに至つたことを衷心愉快に感ぜざるを得ないのである。尙ほ眼科醫諸君は御承知の通りであるが、余の考案した中心視力計測の目的に供する視力計は、從來のものに比し檢者のみで助手を要せず、表と被檢者との間を徒歩することをも省け、居乍らにして計ることが出來、又た被檢者は視力表の記號列を知ることが出來ぬ、又た同高角に於て見得るから僞ることも出來ぬ、尙ほ又た各種の表を要することなく、急速且つ確實の成績が得られ、小兒及び文盲者に向つても使用すること

が出來、其の上永く使用しても、表が汚染することがない爲め、現今では隨分方々で廣く使用されるやうになつたのも、考案者たる余に取りては、喜びに堪へぬ次第である。

目下の研究事項

(神經衰弱の新療法)

尙ほ余が以前から引續いて研究中に屬するのは、神經系統と眼との關係に就てゞある。特に本問題に就ては、余は一新療法として之を社會に公表するに至つた程で、余自身としても密かに多大の歡喜と誇りとを感せざるを得ないのである。今ま簡單に申せば、神經衰弱症及び其の他是迄原因不明の爲め、國手連中が手の附けやうのなかつた官能的の疾病、例へば色弱、神經痛、偏頭痛、ヒステリー、原因不明の耳鳴、難聽、感情興奮、癲癇及び癲癇樣の發作、强迫觀念、夢中遊行症の如き、或は又た躁鬱狂、

早發性癡呆と疑ふべき種々の症狀等の如き官能的疾病、又は症狀群が視格變常に起因せる時、其の屈折異常の矯正に依つて、完全に是等の疾病が治癒し又た大に輕快すると云ふ新事實である。神經衰弱症が如何なるものなるかは、拙著「眼と神經衰弱」に於て詳細を論述して置いたから、敢て玆に蛇足を加ふる必要はないが、要するに本病は一八八〇年米醫ベアド氏が、本病の本塲なる米國で記載せしに始まり、以來約四十年に垂んとする今日迄、幾多の學者は力を極めて其の本體を明かにせんと企てたけれども、依然として今ま猶ほ不明に屬し、隨て之に對する見解も學說も、區々紛々たるを免れないが、翻つて患者の方を見れば、本病は一に文明病と稱せられ學生病と云はれるだけあつて、社會の凡ての階級に瀰漫し、不幸にして一旦本病に冒されんか、其の經過は極めて長く、病況の範圍は極めて廣く、時に頭重、頭痛、頭朦となつて、頭の方面に不快を來し、時に上昇、眩暈、多夢、嗜眠となり、時には種々の神經痛遊走

し、胃腸障碍となつて身體の臟器に迄表はれ、追ては健忘、不眠、思考力減退となり感情極度に亢奮し、遂には作業不能となり、患者は爲めに精神的死亡の已むなきに至るが如き、其の毒手の廣大なる、其の症狀の多樣多方面なること、實に世人の豫想外である。而も此の戰慄すべき本病が文明的學生病として有らゆる階級に瀰漫し、特に有爲の青年子女をして日夜煩悶憂苦、遂に悲難の淵に沈淪せしめつゝあるは、國家の爲め人類の爲め、實に痛歎に堪へぬ次第である。此の慘禍を救濟せんが爲め、余は遂に前記のやうな新療法を發見するに至つたのであるが、其の發見に至る歷史とも云ふべきものは、矢張り余が專攻學科たる領域に於て、腦髓と眼との關係を研究しつゝあつた折の副產物である。顧れば本病に就ては、余も亦た學生時代より苦がき經驗を肉體的並に精神的に重ねて來たのであるから、其の當時より一種の趣味を以て研究に心掛けて居たのであつたが、丁度明治四十二年の或日、余の許に診察を求めて來た患者の

中、其の以前から他の內科醫に診察して貰つて居たものがあつたが、何うしても捗々しく行かぬので、其の醫師よりの紹介により、篤と視機の檢査をして見た結果、余は其の異常を來して居た調節機の過勞を輕減して見たのに、驚く勿れ久しく苦しんだ腦症狀が忽焉として宛ら拭ふが如くに治癒して了つたので、此の事實に勢ひを得、其の後益〻注意に注意を重ねて精細なる研究を遂げ、漸く一の成案を得るに至り、之を非常に嚴密なる診査と共に、親しく幾多の患者に施して試驗した結果、更に完全なる視力を有する人々にも、亦遠視や遠視性亂視等の先天性視格異常が潛伏して居るのを確認する事が極めて多いのを知り、これに適當な眼鏡を處方する事に依り、丁度苦しめられた借金を返濟して了つたと同樣に忽ち種々の神經症狀平癒の緒に就き、彼我共に驚喜する次第であつた。此の如くにして余が從來絕望されてゐた此の方面に一道の光明を認め得るやうになつたことは、多大の愉快を以て報告せねばならぬ事柄であり、又た同

時に余の專門の領域から神經衰弱の起成が明かにせられ、次で完全なる治癒を得らるゝに至つたのは何れにしても全く歡喜に堪へぬ次第である。惟ふに文化の進むに隨て眼の使用を多からしむること彌〻激甚なるものあるは自明の理であつて、若し其の眼に先天性の異常が存在して居たなれば、必ずや其の調節力を過度に働かし、爲めに眼精疲勞を來し、續いて腦に疲勞を齎すことは、理論上考へ得らるゝ事であり、且つ又た一方余の多年に亘る極めて多數の治驗例に徵しても、牢乎たる確信を以て之を公表することに躊躇せぬ譯である。併し玆には難解な專門的理論は避けて、此の神經衰弱が必ずしも眼のみから來るものではない事、及び其の原因が頗る多方面であつて、身體の諸部分からも亦た來るものであるが、兎に角余の領域なる眼から來るものが、世人の豫想外に多數であると云ふ事を玆に附加して、特に讀者の誤解を防ぐ必要がある。

偖て本問題に就て、外國では如何に研究されて居るかと云ふに、米國は生存競爭が世

界で一番激烈であるだけ、本病も亦た流石に本場所であつて、隨分其國の學界の注意を惹き、此の種の報告も出て居り、且つ研究も續けられて居るやうである。此の亞米利加學派の學者なるスチブンス、ビッカトン氏等は、眼障礙殊に調節筋の過勞及び內直筋作用不全の結果、小舞踏病や癲癇、偏頭痛、神經衰弱等を惹起する事を述べ、既に前から度々報告せられて居たが、獨逸の學派では、これに關する報告は至極稀で、シユミツトリムプラー氏の如きは、却つて上述の事項に就ては信用が出來ぬと主張して居るのである。我國に於ても獨逸の學派を受けて米派の主張を信ずるに足らぬと言うて居る學者もあるやうである。抑〻眼障礙が如何にして神經衰弱を惹起するかに就ては、學者の專門的議論が一定して居ないのであるが、今日迄諸所で屈折異常や眼筋作用不全等より惹起さるゝ種々の神經症狀の中、報告せられたものを擧げて見れば、半盲症、頭痛、不眠、吃音、偏頭痛、中心性弱視び黑內障、舞踏病、惡心及び嘔吐、

上眼窩神經痛、月經過多、眩暈、背痛、夜盲び消化不良等の如きものであるが、之を從來の成書に見るに、殆ど此の關係に就ては何等の記載もない、唯だチーヘン氏が神經衰弱の原因中に、眼の屈折異常を算へて、遠視は其の調節機を過勞する爲めに、又た亂視は其の不明像を明視せんが爲めに、知能を勞して神經衰弱を來すことありと論じて居るのと、今ま一つはクラフトエービング氏が遠視、亂視及び不適當なる眼鏡裝用を神經衰弱の原因として列擧し、以上に起因して襲來する眼精疲勞は重症なる腦神經衰弱症の出發點であると書いてある許りである。而して此の兩氏共神經衰弱の療法を說くに當りては、何等此の點に觸れずして、視格矯正の事等毫も記載して居ないのは、尠からず遺憾に思ふ所である。と共に、余が此の方面に圖らずも新發見を爲すに至つたのは、單に余一個の喜びのみでなく、社會の爲め人類の爲め、全く容易ならぬ福音であると信ずるのである。

余が上記の新發見は、其の後精細なる研究調査を積むに從つて、愈々効果の確實にして、且つ範圍の廣大なる眞に驚くべきものがあることを確信せる爲め、如何にして之を完成し、如何にして之を世界人類の一大福音たらしむべきかに就ては、予の絕えず苦心慘澹、益々研究努力を怠らない所である。余が今回多年住み馴れた名古屋より東京駿河臺に移轉し、其處に病院を新築して廣く此の新發見を天下に紹介し、併せて土地が我國家術の中心なるを幸ひ、種々研究上の便宜を得て之が完成を速やかならしめんとせし如き、一に予が前記理想の一端の發露に過ぎぬのである。予は此の新城廓に籠城して不撓不屈、本事業の完成を見ずんば斷じて死すとも已まざる底の大覺悟を持つて居るのである。（大正六年一月一日日本及日本人）

眼の衞生上から活動寫眞の可否

御承知の通り活動寫眞と云ふものは、極めて僅微の一定時間を間隔して撮影した種板を極めて迅速に一定の方向に廻轉して映出するものであるから、異つて居るところの繪が、次から次へと迅速に眼の網膜に寫つて來る事となる。餘りに速かに畫像が現はれる爲に網膜では畫像と畫像とを各個各個に判別するの暇がなく茲に錯誤を生じて、恰かも動いてをるものを見る樣に感ずるのである。元來物像が眼底に映ずると電火石火的に視神經を通して腦に入り、視中樞を刺戟して物體を辨識するものであるけれども、餘りに迅速に動いて居る物體を見詰ると、詰り視器全般を盛んに働かさねばならぬ事になるから、其刺戟の結果として單に網膜のみならず、調節機に疲勞を釀すものである事は一度でも活動寫眞を御覽になつた方は御經驗のある事と存ずる。而して其疲勞現象としては眼に痛みを覺ゆるのみならず、往々結膜炎を起す事がある。猶過敏の人にあつては頭痛や不眠症なぞの神經症狀を惹起するものもある。故に單純に眼の

衛生上の立脚點から論ずれば、活動寫眞を見ると云ふ事は決してよい事ではないと云ふ事に歸着する。殊に何事につけても刺戟を強く感ずる小供には惡い影響を及ぼす事は言ふ迄もない。

活動寫眞は之を一般的に申せば、文明の機關であつて巧に利用すれば敎育上重大なる務めを盡すものであるけれども單に娯樂の目的としてはチト考物ではあるまいか。猶亦叙上の通り眼の衛生上から云へば可なりに若干の害を伴ふものである故に私共の小供には今日專ら行はれてをる世間並の活動寫眞を見せる事を差控て居る。（大正六年大正六年八月一日婦人公論）

靖國神社國祭の議

靖國神社の起源を案ずるに、明治元年六月二日、有栖川總督宮東都に凱旋あらせら

るゝや、直ちに千代田城内に於て、陣歿戰士の爲に、招魂の祭祀を行はせられたるに創まり、次で明治二年六月十二日、地を九段阪上にトし、招魂塲を設けて、爾來年々祭祀を怠らず、同十二年六月四日に至りて、社殿全く成り、別格官幣社に列せられ、靖國神社と命名あらせられたり。

靖國神社は維新の大業を初めとし、國家の存亡に關すべき過去數回の大事件に際し能く皇國の精華を發揮し、一死護國の鬼となりたる忠烈に對し、萬世不朽に之を表旌し之を弔慰し忠魂義魄をして、其の所を得せしめんとの大御心に出でさせ給ふ所にして、合祀の天恩に浴するもの、既に約十二萬人、誰か聖恩の無窮に感泣せざらんや。

今ま祭神生前の官職身分を案ずるに、陸軍々人あり、海軍々人あり、文官あり、公卿あり、華士族あり、神職あり、僧侶あり、農工商あり、婦人あり、維新前後より日清日露、其他の戰役に際し、身を鴻毛の輕きに比し、一死を以て國家を泰山の安きに

置きたる報國殉難の士等、千差萬別なりと雖も、其の忠烈や則ち一にして、千載の下凛乎として秋霜烈日の概あるもの、國家の守護神として、國民は一日も之を忘るべからず、其の祭祀の盛なる、固より其の所なり。

靖國神社祭典は、明治六年以降は、毎年六月二十九日より五日間執行せられたるが大正元年以降は、四月三十日と十月二十三日との兩回を以て、春秋の大祭を執行せられ、兩陛下並に各宮殿下の行幸啓を賜ひ、陸海軍隊は言ふに及ばず、官民擧つて參拜し、滿腔の熱誠を捧ぐ、眞に聖世の盛儀として、忠魂以て瞑すべく、四海遺烈を仰ぐに足ると雖も、顧つて惟みれば、此の比類なき大祭盛祀の東京に於ける一部分に限られ、廣く全國家國民の間に及ばざるは、聊か望蜀の感を禁ぜざるもの無んばあらず。

勿論各地方に於ても殆んど時を同じくして、招魂祭の執行を見るありと雖も、而もこは汎く國家的にあらずして、軍隊所在地等の一部に止まり、或は郡村の間忠魂碑あり

碑の在る處、招魂祭ありと雖も、其の時日と祭式と、區々にして統一せず、汎く國家的の意味に於て遺憾なき能はず。予竊かに惟みるに、東京靖國神社の典祭を以て國祭となし、全國劃一、靖國祭日と定め、招魂祭式を行ふの地と行はざるの地とを論せず本國と新領土とを問はず、苟くも日本人の在る所悉く此日を以て、日章旗を掲げて忠魂遺烈を懐ふの日とせば、英魂永く日本國民の精神と一致し、萬世に亘りて、皇基を護る、亦た遺憾無かるべきか。敢て思ふ所を述べて、識者の教を待つ。（大正六年四月五日日本及日本人）

トラホーム新根治法

國民病として軍隊病として、就學兒童病として、貧民病としてトラホームほど普遍に擴がり、傳染性で且つは難治で、且つは屢々角膜及眼瞼の不具を惹起すものとして、これほど戰慄すべきものはない。

地理的の關係から見ると、トラホームは我日本に最も多い。露西亞、伊太利之に亞ぎ英及佛蘭西には極めて少く、獨逸の或地方には全く存在せぬ。して見ると最も多く我國がトラホームに惱まされて居るのであるから、トラホームの問題は痛切に我國民一般の注意と之に對する適當なる處置を要求して居る譯である。實に統計によれば我國民の平均二〇パーセント即ち百人中二十人がトラホームに犯されて居るのである。そしてこのトラホームが一體どんな階級に最も多いかと尋ねて見ると、納稅の多少から觀察すると、最下級の納稅者即ち人力車夫（名古屋市に於て、市稅年額二圓十錢以下）より以下のものに最も多く、就學兒童の調査によれば實に全トラホーム兒童の八三パーセントと即ち百人中八十三人の割で其等の所謂下級のものに蔓延して居るのである。

ところが予の經驗によると、東京では案外に所謂上流社會の人に割合に多くこのトラホームが蔓延して居るのである。從つて其繼發症に惱める人が中々の多數にあるに驚いて居る。これ恐くは、治癒の不充分なりし爲め、トラホームに對する知識缺陷の爲め或はトラホームを輕視して居た爲めであらうかと考へられる、けれども兎に角トラホームが貧民病であるといふことは爭はれない事實である。

そこで、トラホームの家族的關係の恐ろしさを見るに、此トラホームは單に兒童のみが罹つて居ると思ふと大なる間違で、其トラホーム兒童を捉へて其家族の者を檢査して見ると、其兩親共やはりトラホームに罹つて居る場合が最も多く殆ど檢査せる例の半數以上がそうである。之を以て見るもトラホームは個人の苦痛ばかりでなく、家族全體を虜にせねばやまぬといふ立派なる家族傳染病である。

又職業から見ると勞働者に最も多い。殊に農業に從事する者が他の職業に從事する

者に比して最も多いのは、他の慢性傳染病例へば結核などが農民に最も少ないといふ關係を有して居るのに比して、注目に値する所である。

五官器の病のうちでトラホームほど苦痛を與ふるものはない。而も治術の不完全な爲めに一進一退往苒癒ゆることなく、而も傳染する力の旺盛な爲に他人より避忌せられ、またそれのみならず他國民からも恐怖せられ、海外發展を期してわが國威を四海に發揚せむとする有望なる青年が、不幸にもトラホームの爲に年來の雄志を無念の涙に流して了はなければならぬ。

殊に生活程度の低き者は彼等の非衛生的なる生活の爲に、屢トラホームに冒され易く、且傳播し易く而して容易に治癒し難き爲に其能率を減せられ、從つて勞働することと難きが故に益々生活をして困難ならしめ酸鼻を極めることがある。

かくの如き悲慘事は要するにトラホームの完全なる治療法さへあれば容易に社會か

ら取り除くことが出來る。トラホーム豫防問題は當局者が口を酸くして唱導してもかの結核の豫防と同じく、國民一般の衛生思想が向上せざる限り、少くとも現今の日本國民の知識程度では、全く馬耳東風の感がないでもない。

そこで從來の有樣を顧みるに、治療法の理論は全く完全であるが其の施術に至つてどうも不完全な所がある樣に思はれるのみか、其他色々の關係やら狀態の爲に折角治癒すべきものが荏苒癒えず遂に病膏肓に入りて施す術もなきに至るてふ場合が多いやうに思はれる。少くとも余はトラホームを根治せしめ得る自信を有し、而も從來其言を實行し得て居るのである。そこで余は余の治療法の概畧を述べて社會に知らしめ、一には個人の苦痛を除き、一には社會の難儀を輕くして幾分なりとも國家に貢献する所がありたいと思つて茲に述べむとするのである。

トラホームの病源はまだ確定せられてない。然し乍ら其が傳染性を有して居ること

は最早動かすべからざる事實として認められて居る。それ故他の傳染性と等しく恐らくば特種の細菌の如き微生體がこれを惹起せしむるものであらうとは想像するに難くない。

扨然らばトラホームとは如何なる病のものをいふかといふに、トラホームといふ名稱は希臘語のトラコス（粗糙の意）といふ字から取つた如く眼結膜が粗糙になる疾患である。なほ委しくいへば其の病名の顆粒性結膜炎といはれて居たやうに結膜に多數の顆粒が生じて來るのが其の特徴である。然らば其小粒はどんな構造を有して居るかといふに其の病的組織の標本を作つて顯微鏡で見ると主としてプラスマ細胞及淋巴細胞の集合せるものである。りしてこの小顆粒なるものは多くは上眼瞼結膜穹隆部の深い所から出來始め漸次大きくなりて結膜の表面に出て來るのである。表面に出て來たものは通常其儘にして置けば破裂して其あとに瘢痕を形成するのである。